

岩手県総合計画審議会
令和2年度第2回県民の幸福感に関する分析部会

(開催日時) 令和2年5月28日(木) 9:30~12:00

(開催場所) エスポワールいわて 3階特別ホール

- 1 開 会
- 2 議 題
 - (1) 分野別実感の分析について
 - (2) その他
- 3 閉 会

出席委員等

吉野英岐部会長、若菜千穂副部会長、谷藤邦基委員、
Tee Kian Heng (ティー・キャン・ヘーン) 委員、山田佳奈委員、
和川央岩手県立大学特任准教授

欠席委員等

竹村祥子委員、広井良典オブザーバー

1 開 会

○北島政策企画課評価課長 皆さんおそろいになりましたので、ただいまから第2回県民の幸福感に関する分析部会を開催いたします。

私は、事務局を担当しております政策企画課の北島です。どうぞよろしく願いいたします。

本日ですけれども、委員6名中5名の出席をいただいておりますので、半数に達しておりますので、部会運営要領第6条の規定に基づいて会議が成立していることを御報告いたします。

それでは、開会に当たりまして、政策企画課総括課長の照井から御挨拶申し上げます。

○照井政策企画課総括課長 おはようございます。先週に引き続きましてお忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。先週の1回目の会議では委員の皆様から多くの貴重な御意見を頂きまして、改めて感謝申し上げます。

この部会の分析結果でございますが、この8月から行う政策形成支援評価に反映させることとしておりまして、特にこの幸福実感を県の施策に反映するとなると全国的にも新しい取組だという認識でございます。今回の分析手法が今後の県の評価制度のスタンダードになると考えておりまして、まだまだ道筋が決まっていない中で皆さんに御意見頂いているところでございますが、できるだけ皆さんのご意見をこの評価制度に反映していきたいと考えてございますので、引き続き御協力のほどよろしくお願いしたいと思います。本日はよろしくお願い申し上げます。

○北島政策企画課評価課長 議事に入ります前に資料の確認をさせていただきます。本日の資料は資料1から資料4までとなっています。それから、前回の資料については青いつづりにファイルしておりますので、そちらも今回は使用することになっております。

また、前回の部会で皆さんに御了承いただきましたとおり、今回の部会は非公開ということにさせていただいておりますので、よろしくお願いいたします。

2 議 題

(1) 分野別実感の分析について

○北島政策企画課評価課長 続いて、議事に入りたいと思います。

運営要領第4条第4項の規定により、部会の議長は部会長が務めることとされております。以後の進行につきましては、部会長よろしくお願いいたします。

○吉野英岐部会長 では、改めましておはようございます。連日というか毎週といいましょうか、御出席いただきましてありがとうございます。先週の議論というか協議を踏まえまして、改めて資料を一部新しくつくってもらったり、補足をしてもらっている資料が今日の資料1、2、3、4プラス昨年度の年次レポートの写しというものになっております。

議事の順番ですけれども、今日の次第にあるとおり分野別実感の分析について審議を行う予定ですけれども、その前に本部会のその成果になります年次レポートの骨子について大まかな骨組みを事務局の方から御説明をいただきまして、イメージを描きながらその後の意見交換に持っていきたいと思います。

それでは、資料1の年次レポートの骨子案について御説明をお願いします。

○池田政策企画課主任主査 それでは、私の方から資料1の年次レポートの骨子案について御説明をさせていただきます。

今年度の年次レポートの作成につきましては、令和2年の県民意識調査と補足調査の結果を記載した上で、主観的幸福感及び各分野の実感の分析について記載することと考えてございまして、主な構成といたしましては以下のとおりとさせていただきたいと思っております。

骨子案の最初としては、報告書の位置づけを記載させていただいた上で今年度の検討事項を、そして県民意識調査の結果、今回資料2の方で後で御説明をさせていただくのですが、速報レベルをベースとした記載を想定してございます。また、県民意識調査の補足調査結果、こちらは資料3のような中身を今のところは検討しているというものでございます。

それらを踏まえた上で、IV番で分析結果ということで、主観的幸福感、分野別実感というようにそれぞれ記載した上で、まとめということでIVの分析結果の内容を整理したものというものを想定してございます。参考資料といたしましては、両調査の結果の一覧のような形をつけたり、あとは要領ですとか運営部会委員の名簿、あと昨年分析レポートというものの記載を想定しているというようなものでございます。

おめぐりいただきまして、私の方で昨年のレポートからちょっと抜粋したような形で、こんな感じだというようなもののイメージをお示しさせていただいております。

おめくりいただいて、目次の方は先ほど御説明した内容になってございまして、報告書の内容ですとか、検討事項を書いています。

次に、県民意識調査の結果ということで、それぞれの結果をお示ししています。こちらの方は割愛させていただきますが、補足調査についても県民意識調査と同様に記載しています。

IV番のところについても、昨年のもをこちらの方は整理をしているという形になるのですけれども、主観的幸福感というところについては主に統計的な幸福度の平均点、あとは統計的な変動と、それらを属性にしたようなグラフの記載というようなものを昨年度実施してございますので、こういった形での記載をまずは想定しているということになります。

続きまして、分野別の実感ということで今回、ここだけちょっと新しいものを入れてしまったのですけれども、こちらのところについては時系列の分析結果が出ているということ踏まえまして、各分野の実感をそれぞれ記載するというふうに考えてございます。属性の変化と、当該年度、ここは平成31年ですが、令和2年の分析結果を記載した上で、今回変動が得られた理由について推測して、来年度は時系列の変化を踏まえた上で補足調査から得られた実感が上昇してきた主な理由というものが書けたとは思っていますが、補足調査のところ、上昇している分野については健康の部分のみですので、今回につきましては前年からの変化というのがちょっとここから読み取れない部分でございますので、ここは書きぶりは変わってくるかなと思っております。低下している分野については当然実感が低下した理由というのを推測したものが入ってくると考えてございます。2番の横ばいの分野ということなのですけれども、横ばいの分野のところについては、当該年調査の結果、属性の変化を記載しているのですけれども、横ばいとなった理由というのは、現実的には記載が難しいのかなと思っておりますので、去年の記載分の範囲の中でとどめるのかなと思っております。ですので、主に上昇した部分、下降した部分というのは、今後レポートの中では実感が上下した理由というのは書いていければいいなと思っております。今回上昇というのが記載するのが難しいところではありますが、そういったようなイメージということで、最後にまとめが入ると考えているところでございます。

以上です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。前回宿題になっていた骨子案について御説明いただきました。これの基というか、この前年度のバージョンは今日の資料の一番最後についている令和元年度の年次レポートが昨年度バージョンです。今年度のバージョンが今御説明あったものとなっております。特に補足調査については、昨年度やるというところまでしか御説明していませんので、今回はその結果が出たのでということも含めて年次レポートに盛り込むことになっております。その分析も今年から入れていくということになっております。御質問等あれば受け付けたいと思います。

○ティー・キャン・ヘーン委員 確認なのですけれども、このレポートの順番を見たときに、補足調査というのはどう位置づけされているかというのがなくて、まとめも多分補足調査は入らないような感じでいいのかなと思ったので、その補足調査の位置づけも、もし

まとめ、全体の方だけであれば、なぜ補足調査させておいてそのまとめの中に入っていないのかという、県民から多分疑問につながるかなと思ったのですけれども、いかがですか。

○吉野英岐部会長 事務局いかがでしょうか。

○池田政策企画課主任主査 まとめというのは、例えばどこの。

○ティー・キャン・ヘーン委員 5番のまとめです。5番のまとめというのは、県民意識調査の結果をまとめるという理解をしたのですが。

○池田政策企画課主任主査 すみません、実際にどこまで書き込めるかというところをまだ分からないところではあるのですが、イメージとすれば4番のところの分析のところは補足調査から得られる実感も含まれるので、そういったもので例えばこの分野では主観的幸福感というのはこういうものである、こういう変動が見られていて、その理由はこういうのがあると、そうなっていて、各分野の実感のところについてはこういった傾向が見られていて、その理由はこうなのではないかというところはだまか書き込んで、まとめとして書いていけばいいのかなと思っていましたものです。前のIVの記載内容の抽出というか、整理したようなものをここで記載できたらと思っていますので、県民意識調査が当然ベースとなって、それを補足する形での得られた解釈というか、そういったものがある程度まとめてここに記載されてくるようなイメージを私の方では抱いています。

○ティー・キャン・ヘーン委員 書きぶりになると思いますので、取りあえず分かりました。

○吉野英岐部会長 そのほか御質問ありますか。

○和川特任准教授 確認です。そうしますと、本日の主な議題といたしますか、本日何をやろうかと、このレポートの中のどこを議論するのかというところとIV番の一番下、実感の変動の理由というところを今日議論したいという、そういう整理でよろしいでしょうか。

○池田政策企画課主任主査 はい、そのとおりです。

○吉野英岐部会長 上昇、横ばい、低下ということですがけれども、さっきのとおり横ばいというのは非常に難しいので、低下している項目を中心にやるということになっております。

そのほか。去年のと見比べても結構ですけれども。

○若菜千穂副部会長 今回のティー先生の質問と関連するのですけれども、やっぱり県民意識調査と補足調査の関係というか、目的とかが分かりづらくて、令和元年度の検討事項というところに絡んでなのですからけれども、この検討事項というのは毎年変わるのですか。と

いうのも、ここでちょっと模式図など含めて県民意識調査はこういう形で結果を使いますと、補足調査はこういうところを補足するのですよみたいなものもちょっとここで丁寧に表現をされた方がいいかなというところと、令和元年度の検討事項と書いていたということは毎年毎年検討事項が変わるのかなと、そういうことでないのであればちょっとタイトルも変えながら、ここでもうちょっと議論しないと、私たちでさえも何か混乱するというか、理解に時間がかかってしまうので、もうちょっと前段の説明をここで厚くされたらどうか。

○池田政策企画課主任主査 分かりました。ちょっと去年のものとか、記載内容については今後それで検討させていただきたいと思ってございます。検討事項の方については、多分最終年度、4年間の経緯を見ながら幸福の指標とかの関連等を検討することには記載になってございますので、最低でも最後の年度のところではそのようなお話も出てくると思います。そういったことも頭に入れながら、記載の方を検討させていただきたいと思います。

○吉野英岐部会長 これは、今資料1のトップページの黒い棒のところでも2番とありますが、骨子案の、これ令和2年度の検討事項になっていますけれども、これは令和元年度のこと。

○池田政策企画課主任主査 大変失礼いたしました。令和2年度、今年の部会の検討事項ということになりますので。

○吉野英岐部会長 では、外側は合っていて、この中のあれですね、骨子案の方が令和2年度、つまり今年度やるべきことということでしょうか。

○池田政策企画課主任主査 はい、そのとおりです。

○吉野英岐部会長 昨年度のレポートは令和元年度ですよ。でも、そうすると令和元年度に検討した事項の結果がⅢ以降ということになるのかな。

○池田政策企画課主任主査 すみません、この令和元年度と記載しているところが間違っているだけで、柱立ては今年度のものにしています。あくまでも昨年行っていた分析の内容が単純に落とし込むとこんな感じになりますよというだけで書いているだけなので、これはあくまでイメージにすぎませんので、ちょっとここの記載のイメージが今年度のものをしっかり書いたものではないということで御理解をいただければと思います。

○谷藤邦基委員 まだこれ審議する対象ではないですよ、今日の段階では。だからそこはあまり。

○吉野英岐部会長 では、2年度と。つまり今やっていることですよ、この令和2年度

にやっていることも盛り込んで最後レポートになりますよと。

○池田政策企画課主任主査 はい、そうです。ここで御審議いただいた内容をこれから記載していくということでございます。

○吉野英岐部会長 分かりました。

両方読んで少し気になったのは、両方というのは令和2年バージョンと令和元年バージョンなのですけども、去年は割とパネル調査という言葉も使ったのですよね、このレポートの中でもパネル調査という言葉と補足調査という言葉を両方使ってはいます。今年というか、ここ数回の議論ではほとんど補足調査という言葉で統一して、この調査を呼ぶし、そう書き込むということになっているのですが、事務局としてはどっちがいいのですか。

○池田政策企画課主任主査 我々としては補足調査として整理をさせていただいております。

○吉野英岐部会長 分かりました。では、今後報告書に盛り込むときも基本は補足調査の文言でいきましょうということですか。

○池田政策企画課主任主査 はい。お話しのとおりです。

○吉野英岐部会長 昨年両方使っていたので、パネル調査というのは部内では使うけれども、外部向けの報告書のときは補足調査でいきましょうねと、分かりました。

あとは、令和2年〇月とか、月は大体書いていないのですけれども、大体いつ頃になるのですか。

○池田政策企画課主任主査 最終的には10月に開催いたします部会の方で最終的な決定をしていただいて、11月の総合計画審議会に御報告をさせていただくというような流れを想定してございます。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。では、恐らくおおむね10月というカレンダーと。

○池田政策企画課主任主査 最終案としてはそうなのですが、前回もお話しさせていただいているのですが、8月から始まる評価レポートでございますので、この内容の審議としてはおおむね7月31日のところでもう案としてはほぼ完成させていただきたいと。

○吉野英岐部会長 レポートね。

○池田政策企画課主任主査 はい、年次レポート案としては完成させていただくということをご想定してございます。10月は最終的な文言の修正ですとか、多少の修正を入れたら、

最終案を確定させていただくのが10月かなと。ですので、我々としては7月の段階のレポート案の内容をもって評価の方はさせていただくという。

○吉野英岐部会長 そうですね、分かりました。おおむね今後のスケジュールも大体11月の総合計画審議会に出せるように来年度以降も進めるということでしょうか。

○池田政策企画課主任主査 そうですね、来年度以降も今のところはそういった形での流れを想定してございます。

○吉野英岐部会長 昨年度については、2月なのです。だから、結構年度末に近いところを出したのですけれども、それは初年度だからということちょっとイレギュラーで、実際は今年度以降は11月の審議会に間に合うようにつくりますということいいですね。

○池田政策企画課主任主査 そうです。

○吉野英岐部会長 分かりました。審議会が今回かなりメンバーが変わるのですよね。

○池田政策企画課主任主査 はい。

○吉野英岐部会長 なので、いきなり多分秋からやると。それで委員長も恐らく代わりますよね。

○池田政策企画課主任主査 そうですね。

○吉野英岐部会長 ということで、もしかすると初めて聞いたという委員の方々結構いらっしゃるかなと思って、整合性が取れるようにというか、分かりやすく説明しなければいけないのだろうと、時間も10分とか15分なのかな。

○池田政策企画課主任主査 初めての委員の方には、審議会が始まる前に事前に説明の場を持ちたいと思います。

○吉野英岐部会長 そうですね。頂いた資料によると、総合計画審議会というのは20名以内でやっているのでしたか。

○池田政策企画課主任主査 そうです。

○吉野英岐部会長 それで、14名新と書いてあったのです。

○池田政策企画課主任主査 前は県民計画の策定のことであって、ある程度継続でお願いした経緯がありまして、それで大体任期を3期ぐらいます1人の方という感じで、この

ぐらいというところもあります、3期か4期ですか。

○吉野英岐部会長 最大4期ですね。

○池田政策企画課主任主査 はい、今回ちょっとそのタイミングでと。

○吉野英岐部会長 かなり大幅に7割入れ替わる、委員長も入替わるということなので、初めて聞くという方々にもこういう部会があって、こういうことを検討、分析して報告書をつくっているのだというのを、要領よく分かっていただく必要があるので、その意味ではうまく見せる工夫というか、さっき若菜さんも言ったように図をちょっと入れるとか、それは必要かもしれないなどちょっと思いました。

本調査と補足調査の位置づけはこうなっていますとか、分析にはこう使っていますとか、何か目に見える形でやると私も説明がやりやすいかな、自分のこと言っただけではないのですけれども、もしかして若菜委員にやってもらうかもしれませんけれども、そのときもやりやすいから。若菜さんは多分新任に入ってしまうのですよね。

○若菜千穂副部会長 はい、全然分からないのです。

○吉野英岐部会長 だから、本当に7割入れ替わるというのは相当な入れ替わり方かなと思っていますので、違和感なく委員の皆様にご理解いただけるように見せる工夫も少し入れていただけるとありがたいなと思いました。

では、こういった形で今年は県民意識調査の本体と、それから補足調査、それぞれの結果が出てきましたので、県民意識調査については5年分、5地点分で分析をかけますし、補足調査はまだ2地点しかないのですが、これどんどんこの後増えていくと思うのでけれども、しかも同じ人ですから、かなり整合性の高いデータであるのですが、取りあえず今回については2地点で分析をかけていきますよと。本体は県民意識調査の方なので、それについて分析結果をこう書き込んでいきますが、補足調査の結果もそこも埋めて解釈をしていくところが若干出てきますと。その後まとめを書いて、参考資料をつけるというような骨子案でよろしければ、これでお認めいただいたことにして、今度は中を、肉を盛っていくことにしたいと思えます。よろしいですか。

「はい」の声

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

それでは、資料2以降になると思うのですが、改めて若干新たな数字も盛り込んでいただいた形で、分野別実感の分析について進めていきたいと思えます。

では、まず県民意識調査及び補足調査の結果について再度整理していただいたものが今日の資料ですので、それについて事務局より御説明をお願いしたいと思います。

○桜田調査統計課主任主査 それでは、資料2を御覧ください。1週間前に説明した今年

の県民意識調査の結果の速報について、若干修正した資料を今回お持ちしました。

2 ページ目の方から説明しますけれども、問3-1の分野別実感のところなのですけれども、前回「感じる」と「やや感じる」だけの割合を出していたので、全部の割合を出して、かつ2か年分の結果を出すところのようになりますかということでしたので、御覧のとおりそれぞれまとめております。これは単純集計結果でまとめています。上から順番に、これが前回の項目と同じ順番で並べていますけれども、「自然に恵まれていると感じますか」の方から徐々に「感じる」と「やや感じる」の割合がだんだん低くなっているような割合となっております。参考までに右側の方に平均値、こちらの方が2か年分それぞれつけています。

次が3ページに行きまして、こちらが問3-2の主観的幸福感についてのグラフになりまして、こちらの方、前回平均点では出していなかったもので、こちら平均点でのグラフと、あと属性別の平均値をそれぞれグラフにまとめております。まず、県計の平均値につきまして、今まで平成28の調査から取っておりますけれども、そのグラフを続けて記載しております。今回は5点満点中3.48点となっております。その次のところから属性別の平均値ですけれども、男女別、年代別、そして4ページ目に行っていただいて、職業別、世帯構成別、子の人数別、広域圏別とまとめております。県全体の平均値については、こちらの方で有意な変化を確認したところ確認できなかったもので、横ばいに推移していると考えられました。

○吉野英岐部会長 囲みの中ですね、3ページの上の。

○桜田調査統計課主任主査 そうですね、囲みの中になっております。

○吉野英岐部会長 横ばいと。

○桜田調査統計課主任主査 横ばいですね。0.05、グラフでは上がっているのですけれども、有意な変化を確認できるまでのグラフにはなっていないということになっています。

あと、属性別ですけれども、例えばすごく上がっているように見えるもの、よく見るとサンプル数の方、凡例の方の括弧書きに小さく入れてはいますが、サンプル数が少ないものとかは極端な上がり下がりがあるので、その辺は見る上で御注意いただければと思います。

○吉野英岐部会長 例えば年代別の18歳、黒い点線。

○桜田調査統計課主任主査 年代の18から19が急激に上がっていくように見えます、黒い点線。こちらサンプル数43なので、かなりここは延長幅が大きい年代となっております。

○吉野英岐部会長 ということで、サンプル数を今回入れてもらったのです、この各カテゴリー別の。ですので、これを見ればサンプル数がこれだけ少ないということも分かるのかなということで急遽入れてもらいました。

○桜田調査統計課主任主査 5 ページ目に行きまして、問 3-3 は前回と同じものになっております。

問 3-4 のところ、こちらにも単純集計結果に基づいて「感じる」、「やや感じる」の全ての割合を 2 か年分の帯グラフで出しております。こちらは去年と今年で変化はないという状況です。

次の 6 ページ目、7 ページ目は前回と変更がありませんので、説明は省略させていただきます。次が 8 ページ目になります。8 ページ目の問 4-5 「あなたのお住まいの地域に対する実感をおたずねします」ということですが、こちらの方も単純集計結果に基づいて前回と今回の回答割合をつけております。こちら前回と割合は特に差は出ていない、変動は出ていないということです。

次に、9 ページ目と 10 ページ目なのですが、問 3-3 のあなたが幸福かどうかを判断するに重視した事項が家計の状況が前回 3 位だった部分が今回 5 位に下がっているというのと、就業状況が前回 7 位だったのが 12 位に下がっているというような、変動があったということについてですが、参考までに平成 28 年からの順位を表したのが 9 ページの表になっております。

そして、10 ページの表が県民意識調査の設問の回答する設問、選ぶ項目の順番なのですが、実は令和 2 年の県民意識調査から選ぶ順番を政策分野の順番と合わせることによって変えております。今まで、平成 31 年までは 1 番に家計の状況、2 番に就業状況と聞いていたのですが、令和 2 年の県民意識調査は就業状況が 13 番目に聞いて、14 番目に家計の状況と聞いているということで、どうしても選ぶ人は最初の方をじっくり見てだんだん後ろの方になると次の問題にささっと行ってしまおうという傾向もあるのかなというので、ちょっと今回家計の状況と就業状況の順位が下がっているかもしれないというようなことをこちらでは考えてはおります。

○吉野英岐部会長 一番最後のところですね、これ調査票があるとはっきり分かるけれども、調査票どこかにないのでしたか。

○池田政策企画課主任主査 前回資料の参考資料 1 が県民意識調査の調査票になっております。

○吉野英岐部会長 なるほど、参考資料 1 の 19 ページで問 3-3 で 1 から 17 にずらっと縦に並んでいる項目がありますでしょうか、問 3-3。この選択肢の並びが平成 31 年と令和 2 年では違っているのですよと、これ一番新しいのは令和 2 年。

○桜田調査統計課主任主査 そうです。

○吉野英岐部会長 令和 2 年だと健康が一番上に来ているでいいのかな。

○桜田調査統計課主任主査 そうです。

○吉野英岐部会長 家計の状況とか就業状況は、13番とか14番目の選択肢になっていますと。だけれども、平成31年までの調査票を見ると、家計の状況とか就業状況はもっと上の方にある。

○桜田調査統計課主任主査 1番と2番です。

○吉野英岐部会長 1番と2番と。だから、ぱっと目について1番と2番に丸をつけると今のような解釈があって、成り立つのではないかと。つまり、上にある選択肢に丸がつきやすいことで、こういうことが起こったのではないかというのが今の調査統計課の見立てということよろしいですか。

○桜田調査統計課主任主査 そうです。

○吉野英岐部会長 決して、急に県民の皆さんが健康のことについて本気で重視しているかどうかはまだちょっと分からないと。

○谷藤邦基委員 その説明が正しいとすると、我々は何を分析するのですかといった話になりかねないですよ。いや、正しいかもしれないのだけれども、だからといってそれでは私ら熱を上げて議論する意味あるかという話にもなりかねないような状況です。結局調査票の設計の部分でもあるわけで、そもそも論になってしまうけれども、そういうことでぶれるようなものベースに私ら果たして議論できるのですかということです。正しいかもしれないけれども、逆にだからこそ、では私らが議論する意味はあるのかと思ってしまう、正直なところ。どうなのですかね、この会議はやる意味あるのですかとまで言いたくなってきた、私は。あえて言うと、学術的な議論はどうあれ、県としては実務に生かさなければいけないという立場になるはずなのですよね。

私らも実際会社の経営をやっていると不確かな状況の中で、でも何もしないわけにはいかないから何かをしなければいけない、決断をしなければいけない、そのときに確たる見通しなり確たる根拠があるかといえませんが、多いのです。だから、その程度の意味で私らここで議論すればいいということならばやる意味あるかもしれないけれども、ほかに何かそういう細かいことで、調査票も例えば項目の順番が変わったとか、あるのかないのか、そういったのも全部実はまたチェックしなければいけないという話になってきますよね。どうなのですか、ほかのところも設問の順番とか選択肢の順番とか。

○吉野英岐部会長 影響を受けたのは何か確認できていますか、影響かどうか分からないけれども、平成31年と令和2年でこういう選択式の設問でかなり結果が異なっているのではないかとと思われるものはありましたでしょうか。今のところまだあまり見ていないということよろしいですか。

すみません、その前の9ページ、今最後の10ページの議論をしましたけれども、9ページのこの幸福を判断する際に重視した事項の順位の経年変化については、これはどの設問

に対する答えでしたか。

○桜田調査統計課主任主査 問3-3の「あなたが幸福かどうか判断する際に重視している事項は何ですか」という設問になります。

○吉野英岐部会長 では、10ページは。

○桜田調査統計課主任主査 選択肢の順番になります。

○吉野英岐部会長 これは、だから順位ではなくて選択肢の順番をそのまま書いたらこうなりましたということですね。

○桜田調査統計課主任主査 はい。

○吉野英岐部会長 でも、結果としては9ページの方なのですよ、そうすると。

○桜田調査統計課主任主査 そうです。

○吉野英岐部会長 結果としては、選択肢の順番がずれても健康状態というのは、常にトップに来ていると読んでいいですか。

○池田政策企画課主任主査 そうです。

○吉野英岐部会長 いいのですよね。つまり選択肢の順番は、健康状態というのは去年までは3個目にあったというのは10ページのことですよ、今年が一番上に来ていましたと。だけれども、9ページの結果を見る限り健康状態というのは選択肢の順番が変わってはいけるけれども、一番丸をつける数が常にトップですよということでもいいですか。

○桜田調査統計課主任主査 はい。

○吉野英岐部会長 だから、ちょっとさっきの話だと、選択肢の順番が結果に影響を与えているというようにも聞こえなくもないですが、実態は結果だけ見れば、大きなずれというのは、就業状況については多少順位が下がったのではないかと思いますけれども、ほかの項目について選択肢の順番が回答の割合まで大きな影響を全てにわたって及ぼしているとまでは言えないでいいですか。

○若菜千穂副部会長 やっぱり影響あるのではないかなと思います。

というか、それ以外の理由がなければそれしかないでしょうという、そういう消去法にもなると思うのですけれども、私はこの問3-3で今の議論になっている9、10の資料をつけていただいたのはありがたいのですけれども、やっぱりこの問3-3は私は重要だと

思っていて、これ速報でお願いしたいのがこれはやっぱり年齢別の、例えば20代、30代、40代それぞれでもいいし、それはちょっと事務局の方でやってみた上で、20代と30代と40代ほぼほぼ同じトレンドであれば20代から50代の棒グラフと65歳以上のグラフという形で問3-3のクロスを速報とはいえ載せていただきたいなというのが意見です。

県の施策、市町村の施策も全部一緒なのですけれども、総じてこうやって取るとどうしても分かるようで分からないとか、やっぱり若い人の幸福感というのは経済に偏るねと、年配になってくるとそれよりは健康とか、絶対この世代別で重要な要素というのは違ってくるので、そこまで分析しないと恐らく政策には生かせないだろうと、速報であっても年齢別、やっぱり地域別もやってみた方がいいかなと思っていて、それを加えていただきたいのですけれども、それをレポートの3番の速報のところで作るのか後ろのところの分析結果の4-1に入れるのかちょっと分からないのですけれども、それはどこかでやっぱり入れていただきたいなと、その上での設問の順番はどれぐらいだったのかなというのは、またそこで十分やっぱり議論すべきかなと。

私は、やっぱり見た感じ影響したのだらうと思うのです。こんなに影響すると思いませんでしたけれども、ではやっぱり選んでもらいたい施策を上にも書こうと、私もアンケートの設計はと、これから思いましたけれども、なので、もしかしたら全部分析してさらった結果、やっぱり選択肢の順番が影響を与えてしまったと、それはそれで書くかどうかをどこかで判断すべきですし、それであればやっぱり経年での単純な比較ができないということであれば、それはやっぱり属性間の比較、これは重要な意味もあると思うので、その部分はちょっと重視したレポートにするということでもちょっと今回は並べるといふか、そういう方向性があるかなと思います。その方が意味があると私は思います。

○吉野英岐部会長 山田先生どうですか。

○山田佳奈委員 1週間で大変ありがとうございます、つくっていただきました。

私も若菜委員さんの御意見とかなり共通してしまっていて、1つお願いとしては、先ほども出ましたほかに質問項目の順番が変わったというところがあるかどうかというのは次回教えていただければ、精査していただけるとありがたいかなというふうに思います。

あと、今の選択肢の順番についてですけれども、私は正直これは出るだろうなという、影響はやむを得ないというか、変えているので。ですので、今回はある程度、私は基本的には書いてしまっているのではないかなと思っています。こう変わったことが影響していると思われるのか、こちらある程度の解釈なので、これ以上のちょっと細かな分析というのはすごく難しいと思うので、だけれども、その限りで言えることは何かという、平成31年から令和2年度の動きはそれで行くしかないのではないかなという気がしています。

確かにこれ出していただいて、私もとてもよかったですと思います。そうでないと何でこんなに下がったのだらうというのが見た人もやっぱり疑問に思うと思うので、説明は私も必要だと思っています。

ただ、一方でこれまたお願いになってしまうのですけれども、少なくともあと3年間は項目の順番は変えていただかないということで、経年変化の観測ですか、している間は極力変えないということをお願いできればいいかなと思っております。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

○和川特任准教授 設問の順の変化に及ぶ影響あるいは3-3、幸福かどうかの判断した項目の議論というのは非常に重要な議論だと思います。ただ、前身の指標研究会であれば県民の幸福とは何ぞやというときはこれすごく重要な議論だとは思うのですが、今回部会で議論すべきところは実はこの3-3がメインではなくて、3-1の実感が変化した理由はどうかというところの議論が今回7月までにやらなければいけない求められていることと理解をしておりますので、まずはこちらの議論を優先してもよろしいのかなと思います。

なぜかといいますと、先ほどの議論、なぜ重要度が変わったか、それがこの設問の変更があったのかどうか、これは多分検証は不可能かと思えます。様々なアンケートの議論でもありますけれども、その検証が不可能かと思えますので、これを今事務局に議論を投げかけて理由を探るとするのはちょっと厳しいのかなとも思っています、ここはもういずれ4年間あるいは10年間でアクションプランや長期ビジョンを見直しますので、そのときに、いや、重要度が変わったのではないか、だからアクションプランの構成、あるいは何か変えるべきではないかというのはもう少し長期的な視点で議論をすることにしてもいいのかなと考えております。

○吉野英岐部会長 ありがとうございました。

○若菜千穂副部会長 3-1でしたか、これの変動を、主観的幸福感のトレンドを見るのが重要だというのは、前回からもあるお話だったのですが、この後も多分その議論をすると思うのですが、これを知るためにも私はこの3-3を見ないと多分結果は出ない、個人個人だよねになってしまうのではないかなと思っていて、これを見るツールの一つとしてこの3-3の分析を厚くした方がいいと、あとそもそもトレンドを重視してやると、ちょっと去年のことあんまり覚えていないというか、もしかしたら議論はしたかもしれないのですが、そこに集中することになったのというのはどういう意図があったのですか、もう去年レポートを書いたからでしたか。資料2の3ページ、問3-1、これを分野別で見えていく議論を今日すると。

○和川特任准教授 ええ。変動した、分野の実感が変化をした、事務局の方からはまずはその中で下降した理由を優先的に議論したいという話があったかと思うのですが、その下降した理由が何なのかというのを議論するというのが今回メインでやれたらどうかというお話だったのです。

○若菜千穂副部会長 では、その自然が一番多いとか、家族関係がどうしてこの順番で並んでいるかという議論はもうしたのでしたっけ。

○和川特任准教授 どうしてこの順番に並んでいるか。

○若菜千穂副部長 例えば自然が1番ですよ、家族が2番ですよ、2ページですよ、問3-1。

○ティー・キャン・ヘーン委員 2ページは、あくまでも平均点が高い順でしか並んでいません。1番、2番までこう平均点が高いよというしか、いわゆるこの順番に議論していくではなくて、この並び方は要するに平均点が高い順に並ぶだけであって。

○若菜千穂副部長 そうですよ。

○ティー・キャン・ヘーン委員 はい。その中で下降した方を中心に見ていきましょと。この順番に見ていくのではないですよ、事務局。

○若菜千穂副部長 もちろん、もちろん。その一個一個、自然の変動はどうか、家族の変動はどうかというのを見るのも分かります、その議論もしましょと。ただその前提、その前にもう一個、3-3のあれがなくていいのかなと。というか、そもそもこの自然が40%「感じる」ですけども、そもそもこれが高いのか低いのかというか、その議論はもうしたのでしたか。変動はいいのですけれども、そもそも出発点の位置が是ではないですよ、この出発点の位置の議論をしなくていいのでしたかという確認です。いや、していただきたいなというのもあるのですけれども。

○吉野英岐部長 事務局どうぞ。

○池田政策企画課主任主査 まず、今回の幸福の分析の仕方、去年私はいなかったのですけれども、議事録を見る限りにおいてはトップダウンでやるのかボトムアップでやるのかということで、最初の第1回のお話をされていて、事務局からの説明としては、ボトムアップ、いわゆる各分野の実感を変動を確認して、それを最終的に主観的幸福感のお話をしましょとということで、この部会の審議は決まっているという流れがあるようですので、今のところ主観的幸福感の話がどうしても主体的なところに行っているのですけれども、事務局としてはできれば分野別実感のところをある程度整理した上で、統計的なデータは我々の方で整理してレポート案でお見せして、そこでお話ししていただけたらというのが事務局としての考えになっております。

○若菜千穂副部長 後で議論します。

○山田佳奈委員 いいですか、ちょっと補足。

○吉野英岐部長 どうぞ。

○山田佳奈委員 補足になるのか、すみません、私の記憶では、今ここに出ていますけれ

ども、主観的幸福感というのはそのまま議論するのは結構哲学的な話でなかなか大変なので、それ直でやるのは大変なので、分野別実感のところとの関係で政策と結びつけるために、それとの関係でむしろそちらへフォーカスしつつ考えましょうみたいな、何かそういうふうな話でよろしかったですかね。

そうすると、今多分若菜さんがおっしゃっているのは、勝手な解釈ですけども、どうその結果をお見せするという、多分そういうことだと思うのです。あとは、分析の仕方というのがこれが非常にコアなところで、これから私の今日の一番のところだろうなと思ったんですけども、どうクロスをかけていくとか、どう幸福の変動と、それから分野別というところを筋道を立てるかというのがこれ多分私たちはこれまで初めの手法だと思うので、そこが議論になるのかなと思っていました。

○吉野英岐部会長 ちょっと整理しますと、今年やった全体調査、5,000 人の方の調査の間3のところの基本は幸福に関する設問が並んでいますよということですよ。全体の県民意識調査というのは別に幸福だけ聞いているわけではないので、ほかにいっぱい満足度、重要度も聞いているので、取りあえず今議論になっているのはその間3の幸福に関する設問ですと、この並びが間3-2が今全然出てきていないのは間3-2が全体的な幸福感を聞いているので、これは5段階で表示できていて、5年分のデータ持っているので、これ折れ線グラフで出している。

議論が少しいろいろ出てきているのは間3-1の分野別実感について12の分野が調査票上はあるんですけども、これを「わからない」を入れると6点で聞いていますので、ここについて5年間のデータを持っているので、上がったたり下がったりする状況についてちょっと議論を、要因を少し皆さんで考えてもらいたいと。

特に下がったものについて、後ほどの補足調査等々の結果も念頭に置きながら、何で分野別実感である特定の分野は下がったのだろうと、特に今回は5分野で下がったと言えるくらい下がっているので、ちょっとそれについて重点的に今年度のレポートは皆さんで議論した結果を載せたいというのが1つです。

それはそれでいいですよということで今議論が進んでいるわけですが、今日の速報で出してもらった3-3の幸福かどうかを判断する際に重視した項目の結果についても、もちろん併せて出してもらったんですけども、この話の発端は速報の9ページのオレンジのグラフを見れば、これは去年の分が出ていないから、去年の分は括弧の中の数字しかないから両方で追わなければならないんですけども、健康状態が1番に来ているというのはこのとおりでしょうと、理由はこれから考えてもいいけれども、先週の議論でも大きくへこんでいるねと言ったのが重視した項目の5番手の家計の状況について、63.8 から51.0に落ちていますと、それから就業状況、12番の項目が32.8から18.7にポイントが下がっていますと。この2つについては、特に大きな下がり幅がありましたと、先週もやりましたけれども、では皆さん急にお金のことは考えなくなったのかとか、仕事のことは大して重要だと思わなくなったのかとかというと、いや、どうなのかなと、そんなこともないのではないかと。だけれども、数字としては確かに下がっていると。では、この下がっているその背景は何なのだろうかというときに、今日の一番最後のページの参考で出してもらった、9ページは今下がった家計の状況なんかは、順位も下がっているけれども、や

っぱりポイントが大きく下がっている、十何ポイント下がっているというのは問題で、それはやっぱり家計のことを重視しなくなったかもしれないけれども、そういう理由とは別に調査票の選択肢の並びが後ろの方に行ってしまったために丸をつける人が減ってしまったのではないかと。

でも、そういうことになってしまうと調査の安定性とか、調査そのものの説得力が非常に毀損されているのではないかと、谷藤委員には何のために調査やっているのかということになるというような御意見を頂きましたけれども、実感をつかんでいると思ってやっていたのに、実はその実感をつかみ損なっているのではないかと、調査の見た目の調査票の並びでもって結果が十何ポイントも下がるようでは、それはやっぱりちょっと調査そのものに一定の欠陥というか、欠点があったとしか言いようもないかなというような御意見のようにも私は聞こえました。

ただ、今回ほかのところはちょっとよく分からないので、そういう解釈も成り立つとは思いますが、レポートの全体は問3-1の分野別実感について今回メインで書いていった、分析していただきたいということですので、それは一応御了承もいただいておりますので、分野別実感についての上げ下げについて、これは選択肢の並びの影響はあまり出てこないはずですので、去年と今年が違ってもそれは大きな影響があるとは論理的には思えないので、そういうものは排除できているので、そこでちょっと分析はかけますと。

ただし、問3-3も大事なのですよねというのが若菜委員の御意見で、やっぱり何でこれだけ並んでいる中で健康状態というのがトップに来るような県なのだろうと、これだけ変わらなかったのか、やっぱりそれでさらに、ではどういう人が健康状態に対して重視しているのかというのをクロス集計でもって見ていくべきだと、年代別に見れば差が出ているのではないかと、今回の就業状況の急落についても、どこかが多分がんと落ちたのだと思いますけれども、それはちょっとまだクロス集計見ていないので、私も分かっていないのですけれども、そこについては研究はしていくべきだと思いますけれども、今回のレポートではちょっとあまり不確かなことは言いづらいので、確かなところで言える分野別実感、さらにこれ以上、もともと分野別実感の上げ下げをきちんと議論すべきだということこれまでの議論の流れの中で問3-1を中心にやっていくことでいかがかと私は整理したのですけれども、どうでしょうか。

○若菜千穂副部長 いいです。分野別実感の方が先に行った方がいいと思います。

○吉野英岐部長 谷藤委員いかがですか。

○谷藤邦基委員 要は、多分その問3-3に関しては結論が出せないと思うので、取りあえず、まず今日はその分野別実感の変わったことについて議論をまずやってしましましょう。それでよろしいかと思います。

○吉野英岐部長 ありがとうございます。3-3についてはいろいろデータも出してもらったのだけれども、ちょっとまだ不確かなところがあって、あまりデータなしで議論できないので、3-3についてはちょっと宿題で取っておきますけれども、3-1の方の分

野別実感の上げ下げについても一回少し突っ込んで議論をしていきたいと思えます。

○北島政策企画課評価課長 我々政策評価を所管している部局として、この10の分野別についてこれから政策評価をやっていきます。その際には分野別、いわて幸福関連指標というものを設定していきまして、その指標の達成度、これを中心に評価していくのですけれども、今まで以上に県民意識、これもちゃんと評価に反映させましょうということでこの分野別実感の実感が下がったところを特に分析してもらって、それを政策評価に生かしたいという発想なので、その方向でぜひ…

○吉野英岐部会長 分野別でぜひやっていただきたいと。

○北島政策企画課評価課長 お願いしたいと思えます。

○吉野英岐部会長 テクニカルには、そういうことでしょうか。委員の意識の中で、何で幸福度が高いのだろうなという想いはあると思えます。要は、やっぱり金目のものが高く出るはずなのに岩手県民の幸福を判断する際の重要な要素として健康がかなり常にいつもトップ来ていますねと、ほかの県と比較したわけでもないから何とも言えませんが、毎年そうだというのであればやっぱりこれはかなり非常に重視している人が多いと、これはやっぱり言えるだろうなと思うし、その理由というか、その背景というのも、これはこれでまた分析するとおもしろそうだよなという気はしています。

ただ、それは取りあえず今回政策評価の体系とは全く別のところで議論すべきだと思えますし、重要な議論なので、あまり急がずにきちんと結果を出してからの方がいいかなと思っているんで、今北島さんからもお話ありましたとおり、政策評価にもつなげて、分野は10になってしまうのだけでも、そこをリンクする形での分析でまずやってみましょうと、データも安定していますし、そろっていますので。

では、資料3も説明されますか。

○池田政策企画課主任主査 それでは、資料3の方、御説明をさせていただきます。こちらの資料は県民意識調査と同じような体裁で資料の整理をし直したというものでございます。対象といたしましては600人として、県内に居住する18歳以上の男女ということで、回答有効回収率が96.8%ということで581人の方に御回答を頂いたというものでございます。

各属性の内訳のところについてはこちらのとおり反映させていただいておりますけれども、設問の内容ということでおめぐりいただきまして、2ページのところ、こちらの方については「あなたご自身のことについて、おたずねします」ということで各分野の実感をお話をいただいているものです。これを昨年のもものと比較したものであるということでそれぞれ示させていただいております、1位が自然、2位が家族関係、3位が地域の安全、4位が住まいの快適さという流れになっているというものでございます。5番のところ、すみません、昨年の調査のときは、「心身の健康」ということで聞いているのですけれども、今年につきましては「からだ」と「こころ」を分けて聞いておりますので、一概に比較で

きないというところがございますけれども、一応平均という形で取らせていただいて並べているというものでございます。

あと、次のページ、主観的幸福感ということで、昨年は平均点が3.59であったのが3.77ということで、若干去年よりも高くなっているというものでございます。下のところについては、同様に各属性の部分お示しをさせていただいているというところがございますし、横に回答者数を示させていただいているので、御覧いただければと思います。

次が先ほどお話しになっている「幸福かどうか判断する際に重視した項目」ということで1位が家族関係、1、2がほぼ同じくらいの数字になってきている、家族関係、健康、余暇、居住環境という回答にになっているということで、このところはほぼ今年の県民意識調査と同じような中身になっているというものでございます。

次の設問のこちらも補足調査だけにある「最も重視する事項は何か」ということで1個だけ丸をつけてもらったものです。こちらの方になると健康、家族関係に家計の状況が3位に入ってきていて、余暇、仕事のやりがい、居住環境、就業状況というような形での並びがちょっと変わってきているというような形にはなっております。

以降のところについては、生活全般の方の補足調査なので、こちらの方は割愛をさせていただきたいと思います。

前回口頭で御回答させていただいたのですが、8ページのところには補足調査の分野別実感の時系列変化がどうなっているのですかというお話がございまして、そちらの方を記載させていただいています。今回下がっている「余暇の充実」ですとか、あとは「必要な収入、所得」というのは実感としてはこの範囲の中では上がっているということになります。一方、「地域の安全」ですとか「自然のゆたかさ」というのは下がっているので、5000人の方とトレンドとしては同じになっているという流れになってございます。

以上です。資料4もよろしいですか。

○吉野英岐部会長 どうぞ。

○池田政策企画課主任主査 続けて資料4ということで、前回補足調査と県民意識調査の同質性というか、そういったところの確認をということで御指摘を受けていたものでございます。昨年この補足調査を設計する際に、国勢調査の結果に基づく調査を最初検討した際にやはり各年代ごとを均等に取った方がいいのではないというお話と、若い方からぜひ意見を聞くべきだというような御議論を踏まえて本部会の方で御意見を頂きながら選定した方法が2番のところになっています。当然男女比も同じような形でということで検討させていただきました。

まず一つ人口割合がどうなっているのかということでお示しさせていただいているのが割合として示させていただいています。これを見ると、ちょっと見にくいのですが、太く囲んである部分为本県の人口の割合、18歳ぐらいですと2.1%になったり、20代が8.9、30代が11.7となっていて、調査対象の方の割合を見ますと1.7%、8.1%、14.6%という形になっていて、ほぼ近い値にはなっているのかなど。ただ、当然均等割にした関係がございますので、70歳以上のところが人口割合だと28.9%と高いところが10%ぐらい下がってしまっていると、ただ今回の調査の中で若い意見を聞きたいということであったので、

この部分についてはある程度やむを得なかったのかなと思っている次第でございます。

1 ページおめくりいただきまして、こちらは和川さんにも御協力頂きながら、その信賴区間の統計上の整理というのはどうなっているのかということで、平成 30 年と令和 2 年調査の比較をしてございます。信賴区間推定といたしまして、補足調査の方、性別、年齢階層、居住地の回答者割合を県民意識調査の回答割合に一致させて推定を行うということをやっていた結果が 3 番ということになります。結論からすると 95%、信賴区間のところでは有意な差が確認されているということにはなるのですが、99%の信賴区間にすると有意な差が確認できなかったということで、差はあるのだけれども、非常に大きな差とは言えないだろうと思われるような結論となっております。

それを踏まえた上で次のページ、先ほど御説明したものの県民意識調査と補足調査の単純比較というか、並べ替えをしてお示しをさせていただいています。主観的幸福感というところについては、県民意識調査と補足調査、補足調査の方が若干高く出ているということにはなるのですが、分野別実感の方を御覧いただくと、基本的には 6 位の「余暇の充実」までは全部同じになってございますし、その下の項目もほぼ同じような順番になってきている、下の方ですと収入と子育てのところは順番が入替わっているところもございませけれども、大体同じような傾向を持っているということになります。

先ほどもお話しになった幸福かどうかを判断するのに重視した事項ということの順位も並べてみています。1 位、2 位が順番が逆になっていて、3 番、4 番の結果が逆になっているというようなところがあったり、あとは 7 位の自然環境が補足調査では 9 位のところに下がっていているというところは多少あるのですが、大体近い形での重視をしているところというのは見えてきているのかなと思っております。

それで、一応前回説明する際にも実は谷藤委員の方からもお話をいただいているのですが、今回の調査の目的と趣旨を捉えて、そういうバイアスが効いた調査なのだ整理した上でやるのでよろしいのではないかとということも踏まえつつ、今回の結果を見ると、おおむね同質に近い形の調査であると我々の方では考えますので、御意見をいただければと思います。

以上です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。ちょっと補足調査の方が主観的幸福感の平均値が高く出たので、もしかして恵まれた人だけ調査しているのですかと言われてしまう可能性もないわけではなかったのですが、調査対象者についてどういう人たちなのかということのを少し詳しく分析してもらいました。全体的には 70 代以下の割合が下がるので、少し若年の人たちが多いなという程度であります。取り立ててもものすごく多いというところはあまりないようにも出てきていると思います。

また、信賴区間についても確かにどうしてもサンプル数が減るので、幅は広がってしまいますけれども、そんなに大きな差は出ているものでもないですよということと、調査結果、多少順番のずれはあるのだけれども、分野別実感についても全くひっくり返ってしまうような結果が出ているわけではないと、様々な角度から見ると多少幸福感の高い人たちにはなっていますけれども、この 600 人については一定程度全体の 5,000 人の調査とリンクをさせても大きな違いというものを出不さないで済むのではないかとこの確認が

大体資料4で言われていたことではないかと思って聞いておりました。

結果については資料3の方で、そういった一定程度のリンクが可能だということを踏まえた上で資料3をもう一回見ていただくということになると思います。

それで、低下した分野でしたか、分野というか項目、それは8ページを見れば良いということですか、一番最後の。8ページを見ると昨年やったものと今年やったものの平均点の数字が出ていますよと。網かけしたものがこれ5%水準で有意な変化を認められたものですよと、そして下がっているものについて見ていくと、下の方ですか、例えば地域社会とのつながり、それから地域の安全、それから仕事のやりがい、歴史・文化への誇り、自然のゆたかさ、これでいいのでしたっけ。

○池田政策企画課主任主査 今回御検討していただく内容という趣旨ですか。ここに書いてあるのはあくまでも補足調査の対象となっている方々の結果でございます。

○吉野英岐部会長 ごめんなさい、ちょっと確認でした。今回は全体調査で下がっているものについて見ていって、その背景をこの補足調査とリンクさせて考えてもらいたいということです。全体調査の下がっているものは資料2でいいのかな。

前回の資料をお持ちの方、あるいはなかったらこの青いファイルに入っていますので、前回の資料の資料4。もう一回開いてください。そこにまた似たような表が出てくるわけですが、これが5,000人調査の方の結果の比較になります。特に去年と今年を比較したもので下がっているものについて言うと、こっちの全体調査の方で言うと「余暇の充実」ですね、それから「地域社会とのつながり」、それから「地域の安全」、それから「仕事のやりがい」、それから「必要な収入や所得」と「自然のゆたかさ」です。6個あるのでしたっけ。

○池田政策企画課主任主査 はい、6個です。

○吉野英岐部会長 分かりました。この6個で順番にやっていくということによろしいですかね。

○池田政策企画課主任主査 はい。

○吉野英岐部会長 という整理でまずやりたいと思います。分野別実感で余暇の充実が0.12ポイント昨年に比べると下がっていると、これについて要因を考えると。

○池田政策企画課主任主査 はい、前回の振り返りのにもう一度、前回資料を簡単に説明した方がよろしいかなと思っております。

○吉野英岐部会長 はい、どうぞ。

○池田政策企画課主任主査 それでは、前回資料の方をお開きいただきまして、今回変動

要因の検討ということで、資料6のところを御覧いただければと思います。

○吉野英岐部会長 ここに減った項目だけが出てくるんですね。

○池田政策企画課主任主査 そうです。こちらの方に各分野の方をお示しさせていただいています。こちらの方で、実感が変動した回答者の主な理由というのを抽出するに当たって、どうやったのかということでおめくりいただいたときに分布の図がございます。「余暇の充実」のところですとこの黒塗りの部分は実感が変わっていないので対象外とさせていただいております、その下の部分の色がついている、ちょっと分かりにくいのですけれども、その27というところは除外しているのですけれども、それ以外の下のところでは色がついている部分の人たちを実感が変わった方々ということで整理をして、実感が低下している方々と整理をしております。

次のページおめくりいただきますと、「余暇の充実」の実感の変動した人たちの回答の分布をグラフ等でお示しをさせていただいているというものでございます。今回実感が低下しておりますので、実感が低下した人の回答が1位が「自由な時間の確保」、2位が「趣味・娯楽活動の場所・機会」、3位が「知人・友人の交流」ということになってございます。今のところ現段階でここで見たところであれば、実感が低下した理由というのは主にこういった理由が想定されるのではないかというのが1つございます。ほかの分野も同様に同じような形で整理をしております、それを取りまとめたのが資料6の内容ということになります。

それを踏まえまして資料7でございます。こちらの方については、補足調査から得られた結果の推測、先ほどお話ししたように低下した方の主な理由をお示しさせていただいた上で、各属性との関係性というものを整理しているというものでございます。ちょっとこちらの方の分析に際しては、前回もお話ししましたが、ティー先生にも御協力いただきながら検討した内容を表にまとめてみたというものでございます。

「余暇の充実」ということで、その先の属性別についても書いてある方を御覧いただきたいと思っております、1ページほどおめくりいただいたところですね。こちらの方で右から2つ目の欄のところに差が有意ということで、5%水準と書いてあるところにアスタリスクが2つついているものというのが属性別で有意に実感が低下している、有意なものということでそのうち低下しているものが今回抽出してみると、「余暇の充実」ですと性的なところを見れば男女とも下がっていますということで、年代といたしましては50代と70代と、職業のところは60歳以上の無職の方ということで、世帯構成としては夫婦のみと2世代世帯で、子の数につきましては1人以上の方々、あとは居住年数については一応全ての属性のところで見られますし、広域圏としては県央と沿岸が低下しているというような内容となっております、その内容がこちらの資料7のかがみのところにまた戻っていただくのですけれども、そこのところの左から3つ目の属性分析（実感が低下した属性）というところにまとめて記載をしているということになります。

そこからさらにどういう検討ができるかということを一応検討してみたのですが、統計的に見た際に属性分析から低下した理由の抽出はこの中の属性の分析では難しいということの検討は行われましたので、まとめとしては低下した主な理由は、さきに補足調査結果

から推測した3つの理由が考えられますというような形で整理を行ってございます。「地域社会のつながり」につきましても、同様にやってございます。

○若菜千穂副部長 これは、前回説明されましたよね。

○池田政策企画課主任主査 はい。

○吉野英岐部長 ということで、今もう一回先週の振り返りの御説明をいただきましたけれども、「余暇の充実」については下がってはいるのだけれども、その属性がどこが下がったかという分析もかけてはいるけれども、統計的な面だけ見るとなかなか下がった理由をこれだと抽出するのは難しいということでもいいですね。ただ、各項目ごとに見るとどういった人たちがどれだけ下がっているのかも一応分かるようにしてありますと。私が見る限り70代以上で下がっているとか、60歳未満の無職の人で下がっていると見えるのですけれども。

○ティー・キャン・ヘーン委員 余暇についてですか。

○吉野英岐部長 余暇について。

○ティー・キャン・ヘーン委員 属性別平均点という表を先生方、部長も見ていると思うのですが、見た目では下がっているというか、もちろんマイナスとなっているのですが、統計的に徹底すれば60歳から70歳未満という部分では、前年度に比べて下がったとは言えない、統計的に見てですね。単純な数字では下がっている、50からは下がっているということになります。

○吉野英岐部長 高齢者が少し下げたというような言い方はちょっとできないのですか。

○ティー・キャン・ヘーン委員 言えるは言えると思います。

○吉野英岐部長 だから高齢者が悪いと言っているわけではないのですけれども、高齢者の実感が下がっているのではないかと。

○ティー・キャン・ヘーン委員 であったとしても、その関連づけができないのです。だから、高齢者の方が時間あるはずなのだけれども、下がった。

○吉野英岐部長 というようないろんな見方ができるのですが、何か気がついた点があれば。

○山田佳奈委員 すみません、時間も限られているところなので、ちょっと大枠のところを今日せっかく新しいデータも出していただいたので、その意見というか、提案という

か、させていただければと思うのですけれども、前回のまず資料7で、非常に御苦労いただいて、まず補足調査等の結果との関連というところ、それはなかなかやっぱり難しかったといったところが多かったと思います。それは1つの結果だと私は思っているのですけれども、今回例えばこの6分野を詳細にやっていくのかということによろしいのか、あるいはその属性別調査、それと補足調査との関係をどうするかという、そこをもうちょっと議論が必要かなと思っております。

というのは今回出していただいた資料の資料3の8ページ、補足調査の分野別実感の推移と比べてみると、全体調査ですね、5,000人調査とも比べてみると、傾向が逆なところが幾つもあるのです。先ほど御説明いただきましたように唯一ですね、2つだけ共通しているところがあって、地域の安全と自然のゆたかさは共通して両方とも有意で下がっているといったことが確認できると、これはあくまでもどう組み合わせで分析するかということの話です。

ですので、これはあくまでも一つの考え次第なのですが、優先順位といいますか、まず最重要と思えるのは何かと、この5,000人調査でも600人調査でも同様に有意で下がっているところというのを先に着目する、ほかの上がったり下がったりしているところというのを単年度で見るとどうかというのがちょっと私それどうなのかなという、その懸念があります。

もしそれをやるのであれば、比較事項を幾つかつくって、例えば5,000人調査であれば、それこそトレンドですね、せつかく4年間あるので、その中でやはり傾向としてここが落ちてきているということやまず出していくといったことでもいいのではないかなと思います。その中で特徴的なところがあれば、先ほどティー先生がおっしゃったように、年齢別とかいったところで見えていくという、優先順位をつけてもいいのではないかなと。

それに関わって言ってしまいますけれども、この調査設計を県民の皆さんにレポートをどうお示しするかというところにも係っているのですけれども、4年間ではここまでやっていくつもりなのだけれども、今年度はこのところを重視するみたいな、そういうグラデーションといいましょうか、ある種のロードマップ的なところを示して、今回はここに特に注目します。だけれども、3年後には多分両方とも経年変化が見られるはずなので、そうなってくると補足調査の方でも推移を見ることができていきますみたいな、何かそういう全体像というのも各年度、4年間の見通しというのも示しつつということでもいいのではないかなと思いました。ちょっとついででしたので、話しました。

○吉野英岐部会長 事務局はいかがですか。

○池田政策企画課主任主査 最後の今後どう進めていくかというのはある程度見せていくというのは、そうですね、レポートの頭のところの整理を先程もお話させていただきましたけれども、そういった流れの中でやっていくことは可能なのかなと思っています。

分析の方については、基本的に御案内のとおりまず分野のところを重点的にやっていただきたいというのは先程お話ししているとおりはあるのですが、今お話のあった補足調査の実感の変動というところについては、県民意識調査の完全なリンクというのは不可能だと思っていますので、私の認識としてはあくまでも補足調査として知りたいのは実感が

上がった人とか、今回低下した方がどういった理由でその実感を、どういう理由でそういう変動を感じたのかの材料を集めて、県民意識調査をあくまでも主体として、補足調査で経年を見た人たちはここがこういう理由で低下しているから、もしかするとこういう理由でこの県民意識調査の方々も実感が低下していると考えられるのではないかという解釈するための、あくまでも材料にさせていただくものという認識ですので、ここの変動にあまりとらわれる必要はないのではないかと考えてございます。

ただ、順番としてお話のとおり、同じ傾向を示しているところから入っていくというのは、当然分析のやり方とすれば道筋を立てていく上であるのかなとは思っています。

○吉野英岐部会長 資料の並びは上から下になっているので、特段補足調査とのリンクは考慮しないで、形式的な順番で資料の並びはなっているから、どれだけどこに時間をかけるかということになるかもしれないけれども、山田委員もおっしゃったとおり頭の中では補足調査と全体調査の下がり上がりの同質性なんかも、これは頭の中に入れておいていいとは思いますが、議論の順番は順番にやっても大丈夫なのかなとは思っています。

余暇のものを今やっているわけですがけれども、これ今お話あったとおり、なかなかこれだというような大きな、中心的な要因は今のところは見つかってはいないと。けれども、自由な時間確保とか趣味・娯楽活動の場所・機会、友人・知人との交流を実感が低下した人は重視しているというふうにも回答は読めますということから、どのぐらい書くのですか、ここについては、レポートの中に、文量的に。

○池田政策企画課主任主査 文量的にですか。

○吉野英岐部会長 2ページとか。

○若菜千穂副部会長 ここがメインですよ。

○池田政策企画課主任主査 そうですね。

○吉野英岐部会長 1つの項目について、どのぐらいの分析のスペースがあるのかと。

○池田政策企画課主任主査 スペースについては限っているものではないのですが、基本的な分析とすると今年の調査がこうで、昨年と比べるとこういう形の差が出ましたと。それに対してこういう理由が推測されますということになるので、それを全部並べて書くと1項目で結構なスペースを取ってくるとは思っています。

理由として考えられるものは何もないと書いている程度のことになるのだと思うのですが、例えば地域の安全のように自然災害とか、そういった要因がこの分析部会の中で抽出されてきた際には文量も当然増えてくるということになりますので、それぞれの分析の内容によって大きく変わってはくると思うのですがけれども、ページとしてのイメージとすればある程度このまとめというところが大きなところなのと思ってい

ました。

○吉野英岐部会長 もちろんこの調査事実関係については書き込めると思うのです。例えば今年は何ポイントでした、去年は何ポイントでしたと、そしてまた今年ポイントが下がった人たちの中で重視した項目というのはこれとこれとこれが上位でした、あるいはクロス集計をしてみたところ、こういった年代の人やこういった属性の人がポイントが下がっていましたと。これは別に事実なので、幾つでも並べることは可能ですよね、うそを言っているわけではないから。問題はここから、一種の総合的評価ですよ。では、全体としてこの下がったことについて何と解釈すべきかと、そこを書かなくていいのだったらすごく楽なのですけれども、そこが今のところだと属性分析からでは抽出は困難と結論を書いて、それで一応すみません、終わりですというので。

○ティー・キャン・ヘーン委員 まとめがあります。

○池田政策企画課主任主査 すみません、ちょっと言い方が悪かったので。イメージとすると、まとめに書いてある部分がというお話を先程したのですが、お話のとおりいわゆる過程があって、補足調査結果から推測する過程があって、それらを整理する上で属性分析というところが書けるのですけれども、当然その次のところで結果が得られませんでしたということで終了というわけにはいかないと思うので、そうなったときには補足調査というものの推測というものが、最終的なまとめになってくるような形になるのではないかとイメージを事務局としては持っているというところですよ。

○若菜千穂副部会長 やっぱり初めてなので、解釈云々は今模索しているのですけれども、この解釈をするまでの方法論、分析の手順がまだ足りていない、もちろん全然議論もしていないので。それを今しているのだと思うので、こういう方法でやってみただけでも、有意な結果が出なかったから、ちょっと別な方法をしようという議論をすべきだと思います。

1つなのですけれども、この6項目の抽出、私ここがやっぱり甘いのではないかなというのは、そもそもこの幸福感というのは、やはりいろいろな人が年齢というかライフステージで大きく変わるという仮説が私にはあって、子供を生んだ子育ての世代と、子育てが終わった世代の幸福感というのは全然違いますよね。何が言いたいかというと、この資料は前回の資料4の13ページ、6個抽出しましたというところがまず1つちょっとポイントだと思っていて、これを年代別でやはり取った上で、取ってからの抽出の方がいいのではないかなみたいな。まずそこをやらないと、ちょっとこの6個の抽出が乱暴だったのではないかなと。仮説です。やってみましたか。それをまずやっぱりやっていただいた上で、例えば20代から50代の仕事・収入に差が出たからそれを抽出するという、そういう方法だともうちょっと結論が出やすいのではないかなという仮説が1個。

もう一つ、先ほど山田先生が御指摘されたように、5年間のトレンドと単年度のトレンド、多分両方向にやはりまずは見てみないといけないのではないかな。トレンドを、増加率の有意の差を選ぶかあれですけれども、でも少なくとも多分それをやらないと出ないと思う。そんなに難しくないと思うので。

ちょっと確認ですけれども、これ資料4の13ページは属性補正かけているのですよね、属性補正はかけた結果ですよね、これはもう単純な確認。それをやはりやった上で、6個やるというところをもう一回ちょっと見た方がいい。

もう一つなのですけれども、さらにその上で補正の使い方については先ほど事務局が御説明された手順でいいと思います。5,000人調査では減少したけれども、この補足の方では減少していないけれどもという、そこは私は見なくていいと思っていて、それはそれでいいのですけれども、ただ資料6の例えば余暇で、では補足調査の部分をここ使いますと裏ページ、2ページ目というか、補足調査で例えば実感が低下した人のその他のコメントを出していますけれども、多分ここが一番最後の結論になってしまうと政策に結びつきにくい、その他のコメントだけ拾うなんていうのは多分難しいと思うのだけれども、でも県として知りたいのはここなのではないかなと思うのです。ここをその他のコメントをこういう形で拾うというより、低下したところを拾い出しました、20代の人です、補足調査で捉えるとそれは10人いましたと、その人たちはよく見ると結婚している人がいて、だからこそこういう結果になったのだみたいな、これはその他のコメントを拾うだけではなくて、補足調査の結果のその個人というか、個人の属性を人としてちゃんと捉えた上での分析がレポートで最後入ってきて、だからこうしますという、多分そういうストーリーになるのではないかなと想像をしています。

別な県さんの事業でワークショップをやっているわけですが、幸福ワークショップをやっ、県からの依頼として、このトレンドがどうなのかというのをワークショップで聞いてもらいたいというのがそもそもあって、この分野別実感が減っている、もう下がっている上がっているを直接県民一人一人にぶつけたのです、ワークショップで400人近くの人たちに。はっきり言って分からない。この結果上がっている理由はなんでしょうかと、この委員に聞いても分からないのです。では、どう分析するかというのをここでやるのですけれども、ちょっとそういう意味で抽出のところをもうちょっと丁寧にやると、また別な結果が出てくるかなと思うので、そこを一度御検討いただかないとこれ多分出ないと思う。よろしくお願いします。

○吉野英岐部会長 はい。

○ティー・キャン・ヘーン委員 若菜委員の今の属性別の検討、資料7のこの属性別平均値ではなくて後ろの部分なのですけれども、資料7の後ろについている、こういうのをやっていたかという質問でよろしいですか。余暇が充実していると感じますかというので、これは2年分しかやっていないですけれども、こういうのではなくて、もっと。

○若菜千穂副部会長 これでいいのですけれども、これで下がったのは……。

○ティー・キャン・ヘーン委員 下がったのは、例えば男女だと、これは余暇について、男女で分けて余暇の充実がしているかどうかの平均点を取って、それで男女差がないというふうに抽出というか検証をしたと。次は年代別で検証したというような感じで一番単純なクロス。クロスという言い方は変ですけれども、やったのですけれども、これをさらに。

○若菜千穂副部長 これをさらにというよりここからその下がった要素、6ではなくてここから選んだ方がいいのではないのかということですか、余暇が充実していると感じている人が下がったというカテゴリーはどれですかといったときにはほとんどになってしまう。

○ティー・キャン・ヘーン委員 そうです、そうです。そこがすごく難しく、男女差があったらそれは男女差があったと言えるのですけれども、これは両方下がったということになっていて、年代別でどうなるかと、さっき部長が言ったように40代以上は下がったよねとなっている、職で言うと60以上の無職の方が下がったのだよと言われてたら、これどうしましよかねということになりませんか。

○若菜千穂副部長 私は、年齢かなというちょっと仮説があるのですけれども、年齢でいいのではないかなと思うのですけれども、あるわけですよ、これを12掛ける1、2、3、4、5、6、7、8、ここの中からその下がったというようなのは今6個出していますけれども、この12掛ける7、全部で幾つ80か90ぐらいかな、そこから下がったというのを選んで。

○ティー・キャン・ヘーン委員 要するに、分野別実感で見るとはなくて、もうこれ分野別実感から選ぶのではなくて、属性別分析を全部やって、下がった方を全部抽出で見ているという感じでいいですか。

○若菜千穂副部長 私は、年代だけでいいと思います。

○ティー・キャン・ヘーン委員 年代だけでいいですか。

○若菜千穂副部長 ほかに有意差が出るというのだったらいいのですけれども。分野を12から6に絞りましたよね、下がったというところで12から6に絞るといって、それが乱暴過ぎて。

○池田政策企画課主任主査 基本的にその分野別実感をどう把握するかという部分、そもそも論的なお話に戻ってくるような気がするのですけれども、一応今の調査の設計上は、分野別実感は県民意識調査のこの設問で聞きましたということで、基本的には我々とする、ではその分野別実感を反映させていくためにどうするかというと、そこにさらに手を加えてやっていくことの妥当性が、と今のところ分からなかったんで、基本的にはまずちゃんと分野別のところで有意に下がっているというところについては低下、上昇しているとみなして、これがさらにお話にあったような、どういった年代とか、どういった男性とか女性とかというように聞いてきていて、そこにどういう理由があるのかなという分析のストーリーなのかなと思ったのです。

○若菜千穂副部長 でも、それで出なかったのですよね、差が見えなかったのですよね。

○池田政策企画課主任主査 そうですね、今我々の方でお示しさせていただいている資料は、お話のとおり基本的には統計的に淡々とやってみたときのこれから御審議いただく上でのたたき台としてのお話なので、そこの中から例えば今回お示しさせていただいているその属性の中でさらにこういうところでクロスをかけたらいいのではないかとか、もしくはお話のとおりこういうデータがあるのではないかというお話を踏まえてここの中を整理していくのかなというイメージを私としては持っていたところです。

○若菜千穂副部長 そのストーリーのやり方として、例えば余暇といったときに子供を生んだばかりの人は余暇は重視しないですね、仮説ですよ。仮説を皆さん持った方がいいと思うのですけれども、むしろ65で定年迎えた人はもちろん、よし、これからは余暇になるじゃないですか。それを全部ごちゃっとした中で、余暇が全体として下がっているから余暇を選びました、属性別で見たときに有意差が出ませんでした、それはそうだろうと。むしろ、その12掛ける7の84のカテゴリーから下がったところを選ぶ、その下がったところを選ぶで全部で選んだらもちろんこのティー先生の分析のようにいっぱい出てしまうので、大きく下がったところから選ばばいいと思う。それであれば20代の経済がすごく下がっていると、多分コロナもあって今度下がると思うのです。そうしたら、では20代の経済が大きく下がっているよという、私はそれ自体も重要な結果だと思うのですけれども、ではこの20代の経済が大きく下がっている、では政策的にどうしらいいたろうか、ではもうちょっと詳細に見ましようで補足調査の方を見るという、この順番の方が分かりやすいと思うのですけれども。

○吉野英岐部長 はい。

○ティー・キャン・ヘーン委員 すみません、例えば今の話だとこの資料の7の後ろについているこの⑩番、資料7をめぐっていただくと②番とか⑦番とか、⑩で年代別に収入が減ったかどうかを分析してみたというところなのです。これ見てみたら、確かにみんなマイナスになってはいるのですが、これ有意差は出ていない。こういう結果を想定されているということによろしいですか。

○若菜千穂副部長 有意差が出ない、これ有意は米印2つついているところが有意なのですよね。

○ティー・キャン・ヘーン委員 そうです。

○若菜千穂副部長 それであれば私は年代で、それであればこの2番の余暇の米印がついている、毎回こうやってやられるのであればこの米印のところを選んだ方がいいのではないですかと。

○ティー・キャン・ヘーン委員 この米印の人が、すみません……

○吉野英岐部会長 なぜ落ちたか。

○ティー・キャン・ヘーン委員 何で落ちたか。それは、この本調査で、私が答えるのもおかしいのですけれども、本調査が調べていないのです。さっきもおっしゃっていた子供を生んだかどうかとか、本調査は分からないのです。子供は補足調査でしか調べていないのです。

○若菜千穂副部会長 低下した分野を6つに絞るといふこの最初のステップのところ、ティー先生の属性別平均点のこれをスタートにした方がいいのではないですかという話。こんなの全部やらなくてもいいと思うのですけれども、毎年毎年やるのはどうかなと思うのです。この米印2つ、さらに大きく下がったこの0.1以上下がったところを選ぶ、それについて一個一個見ていくという手順の方が。駄目というか、何かすごく素直だと思うのだけれども。

○山田佳奈委員 大きく変動したところを見ていく。

○若菜千穂副部会長 そうそう、差が有意なところを。

○ティー・キャン・ヘーン委員 70歳の方が大きくマイナス、例えば②番見ているのですけれども……。

○若菜千穂副部会長 ②番の余暇。

○ティー・キャン・ヘーン委員 70歳以上がマイナス0.09で大きいというところで見えてよろしいですか。

○若菜千穂副部会長 マイナス3.1が大きいのではないの。

○ティー・キャン・ヘーン委員 マイナス3.1。はい、そうですね、マイナス3.1ですね。マイナス3.1というところが大きくて、次に……。

○若菜千穂副部会長 これを選択するということがいいのではないですか。

○吉野英岐部会長 順番で言うと、若菜委員がおっしゃっていることは、まず人間の方を先に着目しましょうと、人間というか年代というのが頭にあると思うのですけれども、年齢層ですね。

○若菜千穂副部会長 あと、12から6に絞りましたがけれども、その残りの切り捨ててしまった部分にもしかしたら若い20代がぐっと下がっている要素がある。

○吉野英岐部会長 相殺されて、どこかが下がって、どっちかが上がってしまったので、相殺されて結局変動がないように見える項目もあるかもしれないけれども、ある年齢層においてある項目がぐんと下がるということは、それはやっぱり何か問題があるのではないかと、全年齢層で下がっていないといってもということですよ。

○若菜千穂副部会長 そうそう。だから、そっちは切り捨ててしまっていますよね、もしかしたら大きな減少があるかもしれない。

○吉野英岐部会長 県の基の案というのは、どうしても分野別実感を先に出したいということなので、この分野というのは政策とリンクをするので、その政策の評価のときに分野別実感の方が比較的つながりやすい、各分野に対して政策をいっぱい並べているのだけでも、その最後の総合的な結果としてそれが実感に反映できているのかどうかといったときに、総合的に見ると下がっていないとか下がっているということを言っていると思うのです。だから、分野が先なのですよ。

だけれども、若菜委員は、いや、分野だって薄まってしまうというか、相殺されてしまうというおそれが非常に強いので、やっぱり特定のところに非常に実感が下がっている年齢層があるのだったら、それを放置してよろしいのでしょうかと、見なくていいのでしょうかと、全部を見れば薄まってしまって、高齢者が頑張っ盛り返して、全体的には実感はずがっていないかもしれないけれども、20代に顕著に下がっている項目がもしあれば、それはやはりそこに対しての政策が効いていないというようなものにつながりませんか、例えば先に人間を見るべきではないか、84全部を年齢別ですけれども、見てから、年齢別にやっぱりぼんと下がったところがあるのだったら、それは無視しない方がいいのではないですかと聞こえているのですけれども。

○ティー・キャン・ヘーン委員 この6分野以外にも同じような分析をしてみたらどうですかということですね。

○吉野英岐部会長 そういうことですね。

○若菜千穂副部会長 その上で選んで。

○照井政策企画課総括課長 分野別実感の平均値が上がっていても、例えば年齢層など属性の一部において低下しているという可能性もあることが考えられることから、一通り平均点で上がったところも分析してはどうかと思っています。

○若菜千穂副部会長 そのときには、余暇であれば例えば0.1を大きい50代と70歳以上を見るという。

○照井政策企画課総括課長 一通りやっているそうなので、では次の会議でお示ししたい。

○吉野英岐部会長 データがもしあれば。

○若菜千穂副部会長 そういうストーリーの方がいい。

○ティー・キャン・ヘーン委員 例えば2番の余暇を年代別で見たときに、50代と70代が下がったと、要するにまとめにつながっていくところはその次どうしたらいいのですか。

○若菜千穂副部会長 これは、だからそもそも補足調査どう使おうと思っていたのですかというところなのですけれども、私は補足調査も使った方がいい。

○ティー・キャン・ヘーン委員 これをこの50代、70代で補足調査のその人間を抽出するというような感じでいいのですか。

○若菜千穂副部会長 私としては2つ試みた方がいいかなと思っていて、1つはこの50代と70代の人の表を見ってみるという方法と、もう一つは前回の資料で、私これはよかったのです、これはすごく分かりやすいかなと思っていて、前回も意見させていただいたのですけれども、このときに1位、2位ではなくて高い人と、あと下がった人と上がった人を比べたときに大きく違うところはどこかと、そういう見方をすると私は理解しやすいので、補足調査は私はそう使った方がいいと思いますけれども、それは事務局として一回こういう使い方をしたらどうかという提案を言っている。

○池田政策企画課主任主査 そうですね、資料6の安全のところのグラフをちょっと見ていただければと思ったのですけれども、この説明のときに変化なしと上昇した人、1位、2位、犯罪の発生、自然災害の発生状況でなっていますと。低下した人の方を見るとここが1位が自然災害の発生状況、自然災害に対する予防と、ほかの上昇、変化なしの人に比べて自然災害に対する意識というか、そこの理由として回答している方が多いということから考えても、ここの部分については、災害というものに対するファクターが大きくこの実感の低下にも寄与しているのではないかということでも属性のところの方に推測を立てた上で属性を分析して、そういったのが沿岸でも高いから台風の影響とかそういったものを含めて実感が低下していたのではないかという形での御説明を、ちょっと私の分かりづらい御説明で申し訳ないです。

○若菜千穂副部会長 私は、これはむしろ犯罪の方が効いていると思います、ファクターとして。自然災害の発生は、だって低下した人も上昇した人もどちらも35%前後ですよ。むしろ犯罪の方が大きく差が出ているよね。

○ティー・キャン・ヘーン委員 低下した人の中でどう選択したかということと、変化なかった人はどう選択したかと、一番右側は実感が上がった人はどう回答したとなっているのですが、今説明していただいたのが一番左側の方の説明になっています。むしろ若菜委員

は、変化なしの人と実感上がった人が答えたこの一番高いやつと犯罪の発生比率が低いので、これを比較した方がいいという話ですよ。

○若菜千穂副部長 ここはちょっと難しいですよ、私もどっちがいいかはあれですけども、違いの方が、これ調査票まで戻った方がいいと思うんですけども。

○ティー・キャン・ヘーン委員 参考資料の2ですね。

○若菜千穂副部長 下がりましたと選んでから、ではどれが要素ですかと要素選ぶのですよね。

○ティー・キャン・ヘーン委員 そういうことですね。

○若菜千穂副部長 そうなのですね。自然発生が一番多いから……。

○ティー・キャン・ヘーン委員 確かに資料6というのはH31とR2を比較をしているものです。単純集計したものが資料5になります。ちょっとややこしいですけども。

○若菜千穂副部長 これでも似ているよね、トレンドは。

○ティー・キャン・ヘーン委員 似ているのですよね。

○若菜千穂副部長 だから、これ調査票のときも議論したけれどもね。

○吉野英岐部長 はい、どうぞ。

○山田佳奈委員 本当に基礎的なところ、前回の資料の参考資料2の元の調査票の方の補足調査の項目は前回と今回2回同じですよ、詳細なところで言うと。

○ティー・キャン・ヘーン委員 ないです。これ1回だけです。

○山田佳奈委員 ですよ。そうすると、ごめんなさい、何かよく分からなくなりました。そうすると……。

○ティー・キャン・ヘーン委員 これは、補足調査で5、4、3、2、1つけてもらって、前回は5、4、3、2、1もつけてもらおうと、そこから見て下がった人のものを抽出するというのが資料の6。

○山田佳奈委員 分かりました。ということは、前回は5段階だけでやってもらって、詳細はなかったと。

○**ティー・キャン・ヘーン委員** はい。

○**山田佳奈委員** それで、今回は同じように5段階やって、プラスそのように回答した理由として関連の強い要因を書いてくださいという、そこでだけで見ればいいということですよ。

○**ティー・キャン・ヘーン委員** はい。

○**山田佳奈委員** すみません、ありがとうございます。

○**吉野英岐部会長** だから、前回というのはないのです。5,000人調査を600人引っ張ってきただけだから調査していないの、だから細かいことは分からないと、5,000人調査の範囲でしか分からないですよ、今回は600人についてはより詳細に聞いているので、背景については少し出てきていますよと、何が影響しているのですかとかということです。

○**若菜千穂副部会長** 分野別実感のこのグラフはこういう作り方でもいいのかと、これをどう読むのかというのが多分それこそ本質的な議論をするところだと思うのですけれども、単純に私こればっと見たときに、実感が上昇した人は、いや、やっぱりうちの地域は犯罪が少ないからいいよね、実感が低下した人は、いや、何か空き巣が入って物騒になったね、そこでないのかなと。ただ、それを政策的に結びつけようとしたときに、さっき事務局の説明は、いや、自然災害が1位だから自然災害に力を、税金投入すればいいのでしょうという結論になってしまいませんか。それよりは、ではむしろ犯罪パトロールの方の施策をやった方がいいのではないかと。

○**谷藤邦基委員** ちょっとそこの読み方は違うと思います。要は、実感が低下した人がなぜそう思ったかということの理由として回答しているのだから、犯罪の発生状況のところを指摘している人は少ないということは、やっぱり犯罪は少ないとみんな思っているのではないですか。

だから、これは項目ごとに個別に見ていかないと、なぜそう答えたかというのは一律には言えないような気がする。でも、この項目で私は16番をちょっと注目して。

○**若菜千穂副部会長** 16ね。

○**吉野英岐部会長** 突出して多い。

○**谷藤邦基委員** 資料5で見ても、やっぱり「感じない」という人たちが16番結構挙げているのです。どちらとも言えない人もあるけれども、安全だと思っている人は、そこはあまり重視していない。結構細かく見ていかないと……。

○若菜千穂副部長 これ、そうそう。だから、資料5と資料6で分けてしまっていますけれども、まず「感じる」、「感じない」を見た上で、しかも感じた人が下がったのと、感じていない人が上がったので、やっぱりちょっと分析が違うから、ここの5と6を合体させた表現の仕方でもう一回議論しないとどう読んだらいいのか。ぱっと見ただけでは難しい。工夫したらいい分析ができると思います。

○吉野英岐部長 はい、どうぞ。

○ティー・キャン・ヘーン委員 一緒にやった人間としては、資料5というのは単純集計であって、単純集計よりも前回の答えが本当に下がった人、あるいは本当に上がった人、変わらない人も見た方がいいのではないかという、資料6で見ましようという強い思いがあったのです。なので、この資料6の、一応完全に本調査と一致するとは私も思っていないのですけれども、多分こうではないかなというのが資料7に書いてある補足調査の結果の①、②、③というところに載つけたのです。そう分析をして見ているのです。この委員会の中で資料5もやっぱり何の形でも入れた方がいいというのだったら、もう一回やり直すしかないとは思いますが。

○若菜千穂副部長 資料5も入れた方がいいと。だから、報告書のつくりとして下がったところ抽出しました、感じていると言った人、感じていないと言った人の重要視しているのはこれです、さらに低下した人、上がった人の要素はこれですという、それを一つ一つの要素ごとの組立てにする方がよいのではないですか。

○和川特任准教授 ちょっと補足をさせていただきます。今回事務局から出た資料をどういう作業でやったのかというのを御説明をした方がいいのかなと思うのですが、確かに若菜さんがおっしゃったことを実は事務局の方でもやっています。なぜこれ3段表になっているかという、横に比較するためのものというのはおっしゃるとおりで、実は事務局でもこれは横に比較をして議論をしております。そして、1枚目をめくっていただくと、前回調査で何点で今回何点だったかという、こういうクロス表になっているのは、先ほど若菜さんがおっしゃっていたように下がったといっても、いわゆるプラスからマイナスの人とか違うのだよね、それはどう分布しているのかというのを見るために実はこのクロス表がついております。これは、全部事務局の方でチェックしてみた上でも余暇は正直分らないねと、先ほど言ったとおり安全はこういう感じだね、仕事のやりがいはこういうことは分かりそうだねというのを、これは全部チェックした上で出てきたというのが今回の資料でございました。単純に高いのだけ引っ張ったというようにもこれ見えるのですけれども、実は全部そういうチェックを今までした上で出てきたというのはちょっと御理解をいただければと思います。

○若菜千穂副部長 全部やられているとは思っているので、それを組み立てるだけなのですからけれども、ではこの数字どう読むかと、みんながばらばらになっているので、何か議論しづらいなと思います。

○吉野英岐部会長 はい、どうぞ。

○山田佳奈委員 私も若菜さんのおっしゃる差というのはとても興味深いなと思っていたのと同時に、これすごく厳密に言うと関連の強さということですよ、すごく厳密に。どういうところに意識が及んでいますかということに観点があってということだと思っているので、そのところの呼び方というのはちょっと表現の仕方が難しいとは思いますが。どの項目についても、どの人についても高いと、何か一つずつ文書をつくってしまった方が早いのではないかなという気がしているので、総じて関連の強いと思われるところみんながそれぞれ意識しているのはどこかということと、あと特にこれ地域の安全なので、まさにそれこそ広域圏というのがひょっとしたら関わってくるのかどうかとかという、そこまでやる時間があるかどうかとか、ちょっとあれですけども、そういったものちょっとそれぞれのひょっとするとその理由、分野別が出てきたところでその内容に応じてクロスをかけるところが変わってくるという、そういうことにもなるのかなと、これはちょっと話飛んでしまうかもしれないけれども、一応言うだけ申し上げます。

○ティー・キャン・ヘーン委員 すみません。今のお話だとこの資料7ですね。資料7というのは、この資料6の安全の部分で抽出してもらった分がそこに載っているのです。要するに、下がった人の分が資料7の2列目にありまして、これだけでは不十分なので、属性別で分析しましょう、さっきおっしゃったように安全では全地域が下がっているよと統計的に判断して、特に数字が大きいのは沿岸だよと、では分析の結果がまとまるのではないのでしょうかという事務局案となっています。やっている、私が言っているのですかね、一緒にやっているのです。

○山田佳奈委員 すみません。そうでした、そうでした。

○ティー・キャン・ヘーン委員 大丈夫です。

○吉野英岐部会長 資料7、5,000人調査の属性分析、クロス分析は、これ並びが全部、別に大事、大事ではないという意味ではなくて、男女、年齢、職業、世帯、子の数、居住年数、広域圏と7つの項目で全部クロスしてもらっていますね。

○ティー・キャン・ヘーン委員 はい。

○吉野英岐部会長 だから、一遍に人間の中でこれ全部見に行っているわけですけども、どれが大事なクロスの項目なのかと先に考えるべきなのか、それとも項目の大事さではなくてポイントの上げ下げ、要するにマイナスの大きいところだけなのかと見ると、大きいところだけ今度見えた方がいいというようにも言えるので、実はこの7つのクロスの項目で比較的多分県が非常に大事されるのは広域圏なのではないかなと思っています。

やっぱり特定の広域圏である分野別の実感が大きく下がっているということは何か課

題があるのではないのかなと、県庁はそのようにはおっしゃっていないけれども、昨年幸福感が県南で大きく下がったときかなり突っ込んで議論をしたのです。何で県南だけこう下がってしまうのだろうねと、ほかのところはそんなに変わらなかったのにと、県南にはこういうことがあるのかな、ないのかなという話をして去年は部会を進めていったのですが、結局そのときにやっぱりある特定の地域で、特定の項目で実感が下がるということはやっぱり何らかの要因があるわけで、それを解決していくために各広域振興局で頑張ってもらおうと、つまり県の政策というのは本来的であれば県全体に影響及ぶものであるのだけれども、最近の県の政策のつくり方として、広域圏によってやっぱり力を入れるもの、力を抜くとは言いませんけれども、普通にやっていくものというように、広域圏レベルで県の政策を柔軟に出し入れしていませんかと、だったらそこがちゃんと結果が出ているのかも見ていきたいのかなと思ってこの広域圏が入っている。

しかも、150人ずつきちんと取っているということは、広域圏に対して一定の分析が可能なように補足調査も全体調査も設計されていると考えると、私はある意味では、結果が差が出ない方がいいのだけれども、広域圏についての分析はやっぱりこれ欠かせないのかなと。

それから、若菜委員もおっしゃっているとおり、やっぱりこれは年齢別でかなり違うのではないかと、実感というものが、まず仮説ということかもしれませんけれども、平均値として全体の実感あるいは分野別の実感も出てくるけれども、これまでの議論、研究会等々の議論で見ても、やっぱり年代によって幸福感というのはかなり変わるし、一般的なトレンドとして20代が一番高くして三、四十代で底を打つ、そして70代になるとまた上がってくるというような年齢別の特徴を一般的には指摘されているところです。

それを踏まえて言うと、年齢別に差が出ていないなら問題はないのだけれども、年齢別に差が出てきたということがある程度確認できたら、それはやっぱりきちんと年齢別の政策というものが変わってくるのではないかと、特に特定の年齢層で実感が全然得られないというものがもしあるのであれば、そういった人たちにターゲットを絞った政策というのが全般に広く浅くやるよりは効果が出るのではないかとというような政策的な選択肢につながっていくのではないかとということを考えていくと、ばつと今全部7つの男女、性別、年代、職業見ていますけれども、やっぱり特定というか、一定程度重要視する項目を見ていくのも私は必要かなと思っています。取りあえず全部見ても構わないのですけれども、人間の頭も限界があるので、これを結局何が大事なのだっけと。

はい、どうぞ。

○ティー・キャン・ヘーン委員 私は分析屋なので、気持ち悪いのです。何が気持ち悪いかというと、年代と広域だけでは気持ち悪いのです、ほかの属性にはないかということなので、事務局と一緒にやったときに全部示してくださいと、ここで議論するので、ここでこの場でこれ見ましようと言ったらこれはこれで見ただいて構わないのです。これないですね、あれないですねと言ったらまた次やらなければいけないので、一遍に全部示したというのも私が指示したところなので。なので、全部出ているのです。この場でこれとこれを重視しましようとなったら、それはもうデータあるので、これすぐできるのです。だから、ここで決めていただければさらに分析を進めてくださいとなったら、私も分析屋

なので、やりやすいので。

○吉野英岐部会長 もちろん恣意的に選べないので、一応全部やってみました。

○ティー・キャン・ヘーン委員 そうです。だから、この中で、この場で選んでいただければ、さらに分析はできます。

○吉野英岐部会長 思いつく限り全部やって、思いつくというか……。

○ティー・キャン・ヘーン委員 そうです、そうです。

○吉野英岐部会長 属性として聞いているものについては全てやったというのは統計屋さん、そのとおりです。

○ティー・キャン・ヘーン委員 若菜委員が言った年代とか広域圏もさらにやってくださいというのだったら、できることはもちろんやっていくのですが、今おっしゃった広域圏はパネルは1回しかやっていないので、広域県別でやると下がった上がったで、さらに抽出は大変なことになるので、資料5の広域圏別バージョンはできると思います。

○吉野英岐部会長 補足の方で。

○ティー・キャン・ヘーン委員 はい。ただ、上がった下がったで、さらに抽出してくださいと言ったならば、これは多分600人で抽出したならば、結果は全く信用できないと思いますので、それはちょっと理解していただきたいのです。

以上です。

○吉野英岐部会長 これ言っているのは、結局レポート書くときに、つまり項目、分野別実感で、ある分野別実感についてはこういったことが効いているのではないかと、あるいは効いていないのではないかと、ある分野別実感については、いや、そっちはあまり関係なかったもので、別の属性が効いているのではないかと分野別実感を中心に要因を探っていくというのが今のスタイルです。

確かにそれは全部見た上でやっているもので、別に何かを隠しているとか、特に何かを強く意図的に強調しているというものではないので、誤解の少ない書き方になると思うのですが、結局レポートとして書くときに何が言いたいのですかと、一個一個の分野別実感がそれぞれ何かと結びついて、上げ下げ結びついて、それはそれでよろしいです、分かりましたというときに、ではこれどういった政策的なものに結びつけていけばよろしいのでしょうかと、私たちは一体何をすればいいのですかというような現場の声はないですかと、現場の声です、その政策を立てる人たちに対してどういうメッセージを出していったらいいのだろうか、別に隠すとか強調とか、それはなしとして、そのときに政策をつくる人たちが非常に気にされているというか、注意深くやっつけたいのは、やっぱり

1つは広域振興局というものがかなり一つの力を持っているというか、単位として政策立案に大きな影響を持ってきているのであれば、やはりそういったデータを出してあげて、広域振興局で見ても特定振興局については数字が下がっているように見えますよと、この影響というのはさっき言った、災害でいえば台風、自然災害、犯罪というよりは自然災害でこういうことが起きたということ、実感が下がったということは比較的言いやすい、聞く方もなるほどと。

だったら、きちんと防犯よりは防災的な、あるいは災害起こった後の対応策とか、そういったことにきちんと力を入れていくことで災害が仮にかなりの確率でまた来たとしても、分野別実感はそんなに下げないで済むのではないかというように使っていただけるのではないかなと。

あるいは若菜さんは、県民全体を見たときに、やっぱり年代というのが非常に実感的に差をもたらす要因になるのではないかと、仮説ですけれどもねとおっしゃっていますけれども、そうするとやはりいろんな政策を打つときに政策を打つ実務の課の方たちが一定程度の年齢を想定したような形で政策を打っているのであれば、例えばシニアに対するこういった政策が本当に効き目があったのかどうかとか、あるいは青少年に対する政策がこういった効き目があったのか、それがあんまり関係ないような道路とか公安というのもありますけれども、県民の生活、暮らしに対して影響の及ぶような政策というのが恐らく県民全体どの層にでもというのはなかなか今言いづらくなっているのではないかなというより、むしろ選択の順番をつけて政策を打つべきなのではないかなというような議論もしあるのであれば、県民全体が上がった下がったという議論は政策を打つ側にとってみれば情報不足ではないのかと。

我々が欲しいのは全体像ではなくて、我々がターゲットとしているある特定の人たちに対してそれがちゃんと実感できていただいているのかどうかを聞いてみたいというか、データあるのなら出してほしいというように使ってもらえるのではないかなと思っているのですが、その辺は何か事務局的にはアイデアはありますか。毎回調査結果を出すというのは、実は今年は6項目でした、落ちたのが。来年やってみたら2項目でしたと、だから今年はもう落ちていないので、書けること少ないですとなると、そのときの落ちた落ちないの項目でもうレポートの量も内容も変わってしまうおそれがあるので、一応今回1回目だからまだどっちでも大丈夫なのだけれども、一定程度ターゲットを念頭に置いた形でのレポートの作成も、それは若菜さんがおっしゃっているのが一つではないかなと思って聞いているのですが、いかがでしょうか。

○池田政策企画課主任主査 お話のとおり、まず一義的には分野別実感の整理で、各年代とかというところまで踏み込むかどうかというのはあるのですけれども、イメージとしては今回いただく内容が、政策を形成する上での基礎となる問題点があって、それを各分野の所管する部局がその中から課題を抽出して対策としての政策を構成していくための基本的な材料になってくるだろうと思っています。

ですので、お話のとおり、掘り下げられてある程度ターゲットが具体的になってくれば当然ロジックモデル形成する上で事業のターゲットが明確化されるので、それに対するアプローチというのも分かりやすくなってくると、事業構成がしやすくなってくると

思います。ただ、問題なのは限られた時間の中で評価まで活用するというところで、どこまでも掘り下げていくというのは多分現実的には難しいだろうと思っていますので、一つはまずは大きく整理をしていただいて、その中で見えてくるものどこまでできるのかなと、今回のチャレンジの主たる部分だと思っていますので、そのところが可能な限り掘り下げられることを我々としても望んではいるということになります。

○吉野英岐部会長 総括課長、何かありますか。

○照井政策企画課総括課長 やり方の手法として、事務局で一通りやっているという話をさせていただいたので、その一通りやっていることをまず委員の皆さんに説明する必要があったと感じております。分野別の幸福感の実感が上がっているものにおいても、例えば先ほど説明があったとおり一部の年齢層、あるいは一部のターゲットにおいて極端に下がっているのであればそこは政策を打つ、手法としてはあり得るだろうと思いますので、一通りやっていることを説明した上で先生方に議論いただいて、その結果、最終的にとりまとめていった方がいいのかなと感じているところです。

○吉野英岐部会長 若菜さん帰ってしまいましたけれども、84 出す分にはいいと思うのです。つまり一応平均値としては変わっていないから、上がった下がったは言えない項目もあるのだけれども、もしかするとそれは相殺されている可能性があるということですよ。相殺されている可能性というのは年齢別には結果が違うというのを一応前提に考えているので、結局どこかがすごく下がっていたのだけれども、どこかが上がったためにプラ・マイ・ゼロになってしまったけれども、やっぱりぐんと下がっているところを放置して見なくてよろしいのかと。だけれども、全ての項目でそれ見ていくと大変なことになってしまうと、職業でも見なければ駄目だとか、例えば子の数でも見なければならなくなってくるとすごく分析する項目が増えてしまって、今でさえこんなに多いのに、これが全て上がっていない、下がっていないというのを全部やったらもう人間の処理能力を越える可能性がある。なので、どこかで区切りつけなければいけないというときに、有力なカテゴリーとしては、彼女はやっぱり年齢でないのかなと常におっしゃっているわけです、これは年齢と性別なのかもしれない、例えば 30 代女性と 40 女性とかあるのですけれども、年齢と性別は基本的に分かりやすいカテゴリーだし、多くの人にとってみれば、そういう切り方というのは特段不思議な切り方ではないと、あるいは年齢も 10 歳別に分けるのか、若年、中年、高年で分けるぐらいでもいいのかもしれないのですけれども、それを平均値が動いていないところでも一応見るべきというのはそうかなとは思って聞いていたのですけれども、ほかの委員の皆様いかがですか。

ティー先生はやればできますね、すぐ。

○ティー・キャン・ヘーン委員 若菜委員のおっしゃるとおりだと思います。要するに、下がったところは見るべきなのですけれども、でも変化がないとか上がったところでもその中でも、さっきおっしゃっていただどこかに落とし穴あるかもしれないので、もちろんそれは全ての分野の検証はしていたとは思いますが、すぐこれは出せると思います。

○吉野英岐部会長 それも踏まえて議論してもいいのかもしれないなと思いました。

○ティー・キャン・ヘーン委員 ちょっと確認なのですけれども、補足調査の例えば広域圏別の単純集計あった方がいいと。

○吉野英岐部会長 いいのではないですか。

○ティー・キャン・ヘーン委員 それと、あと年齢ですか、年齢だとすごくたくさん……。

○吉野英岐部会長 年齢だと、もうだから再カテゴリーしないとちょっと減らない、すごく。

○ティー・キャン・ヘーン委員 すごく大変です。

○吉野英岐部会長 セルが5以下になってしまう。

○ティー・キャン・ヘーン委員 これがいっぱい、年齢ごとなので。

○吉野英岐部会長 あるいはすごくサンプル減ってしまいますと。

○ティー・キャン・ヘーン委員 150人、そうですね。600人なので、もしかしてちょっと。性別も入れるのですか。

○吉野英岐部会長 性別というのは、意外と差が出ていないような気も。

○ティー・キャン・ヘーン委員 宿題の確認みたいな感じなのですが、どうですか。

○吉野英岐部会長 性別ぐらい入れればいいのではと思います。使えるかどうか分からないけれども。というのは、もちろん分野をまず優先的に分析の第1段階にしているのだけれども、それは捨てているわけではなくて、それはそれできちんとやるべきだけれども、そこがこぼれてしまうようなところについてもせっかくデータがあるのなら見ていくべきなのではないと思うのです。ただし、それをやった上で、では本当に余暇の充実についてどういう要因で下がったのかと最後言わなければいけないのかもしれないかもしれませんが、難しそうだなという気はちょっとしているのです。

○照井政策企画課総括課長 まずは、この表は全分野やっているとありますが、これはすぐ出せます。この中で星が2つついているものは、これは有意性ある項目だという説明をされているので、これの全部についてというのはあれですよ、こういう表つくってきますかという話をしているのですよね。

○ティー・キャン・ヘーン委員 これは無理です。これはパネル調査なので、多分すごく少なくなるので、それに関しては無理で、要するにお示したパネル調査に関しては年代別の単純集計はできる、単純集計であればこういう年代別にもう一回振り分けて、今おっしゃった部会長は単純集計したときにこの表がいっぱい出てくるので、年齢を例えば20代や30代より若い……。

○吉野英岐部会長 若い、真ん中、お年寄りみたいな。

○ティー・キャン・ヘーン委員 そう分けてやったらどうかということです。それは、どちらかというとききおっしゃった広域圏の方は、もしかしたらパネル調査で広域圏の方の単純集計は政策に反映するときにはあった方がよりいいかもしれません。個人的にはそう思います。

○吉野英岐部会長 最後に、だから確定的なそういう要因までレポートで踏み込まなくていいのであれば、やっぱり今のクロス集計でもなかなか全体を説明する要因というのはいきり切れないですよ。ただそれはそうなのだけれども、例えばある年齢層やある広域圏において星がつくぐらい有意に下がっていて、その下がり方が0.2以上だと、0.2とか、0.3とか、つまり大きく下がっているとか、大きく上がっているというような項目があればそこはどうかののだろうかということは議論してもいいとは思っています。そうしないともう100個も200個も議論しなければいけなくなって非常に複雑な、あるいは大変な議論をした結果、結局分からなかったというようなことになってはいけないなど思っていますので、むしろ逆にターゲットがはっきり分かっているならば、そこはこういう理由でこの年齢層は下がったのではないのかねと、あるいはさっき言ったこの地域はやっぱり一定程度の何か共有できるような情報を皆さん持っていれば、そういう理由であれば確かにそうなのではないかなというようなことで読んでいる人が納得してくれるというか、そうだろうなと思ってくれるかもしれないとも今思っています。

だから、基本はこのベースラインを崩さずに、項目別分析はもちろんこのままやってみるのだけれども、1つは抜け落ちたところを抜け落ちないようにちょっとやってみるのと、項目別分析の中で最後に解釈を書くところで、分野全てに通じるような解釈を書かなくていいというのであれば少しあるターゲット層に絞った解釈を例示的に挙げてみるということかなと思っています。

谷藤さんはいかがですか、書き方とかレポートも含めて、分析の仕方も。

○谷藤邦基委員 まず、方法論の議論はあまり長々やっても終わらないので、不完全でもいいからどこかで1回フィックスしましょう。その上で、やっぱり統計分析からだけでその因果関係を見いだすというのは無理なので、こういう可能性が考えられるという程度のことしか書けないと思うのです。

だから、あとは話の流れとして、大枠はまず6つの分野を見るけれども、若菜委員の言うとおりの弾いた分野で何か特に顕著に下がっているところがないかどうかの確認をして、

もしあればそれは別に章立てして、この分野でこの特性は特に変化しているというのを取り上げるような流れにしていくということでもいいのかなと思って今日は聞いておりました。

あともう一つ、私そういうことを言いながらちょっと混ぜ返すような話なってしまって申し訳ないのですけれども、気になっているのは下がったところ、上がったところという議論が主体になっているのですけれども、変化がないところでも顕著に水準が低いところがあるとしたら、それは手当てしなければいけない。

○吉野英岐部会長 そもそもレベルが低いところね、実感が感じられない部分。

○谷藤邦基委員 低値安定のようなところ。

○吉野英岐部会長 所得。

○谷藤邦基委員 所得とは言いませんが、例えば余暇のところでも、属性別平均点の一番最初のところで、年代別で40歳から49歳は非常に安定した数字なっているのです、5年間。だけれども、常に平均下回っているわけです。これこのままでいいのですかという話ですよね。30歳から39歳の方がもっと低い数字になっているからいろんな話は出てくるかもしれませんが。要するに、変動だけではなくて水準自体が低いところ、低値安定しているようなところがあったら、そこはやっぱり何か。

○吉野英岐部会長 なるほど。これ安定しているからいいという問題ではないと。

○谷藤邦基委員 ないと思うので。低値安定については、むしろ逆にそこそそこ入れが必要かなと。

○吉野英岐部会長 何やっても上がらないようでは駄目ですねと。

○谷藤邦基委員 そこはちょっと注意が必要かなと。

○吉野英岐部会長 高値安定だったら、これはいいでしょうよね。

○照井政策企画課総括課長 逆に高値安定であればちょっと下がったぐらいでも、まあ、ある程度という見方もできる。

○谷藤邦基委員 いずれ考え方というか、目のつけ方というか、そういった点でちょっとそこは注意が必要かなと。

○吉野英岐部会長 常に低いところとか、常に低い年代層とか実際あるではないかということですね、今御指摘のとおり。

○**谷藤邦基委員** 今言ったところが問題にしなければならないほど低いかというのはまた別の話ですが、例えばそういうこともありますよということです。

○**吉野英岐部会長** 変化率だけではないのではないかと、絶対値としての問題もあるということですね。どんどんボリュームが増えてくる可能性がありますね。

○**谷藤邦基委員** あまり言うとし訳ないなと思うところもあるのですが。

○**吉野英岐部会長** はい、どうぞ。

○**山田佳奈委員** 今谷藤委員さんがおっしゃったことは本当に私も同じなのですが、やはりデフォルトの方にも先ほどおっしゃってましたチャレンジというか、あくまでも今年度これですまずやってみなくてはということは明記した方がよろしいかと思えます。分析部会として、少しずつ来年変わるかもしれないわけですので、やはり目的というのは明確にした方がよろしいかと思えます。ということと、それから先ほど吉野部会長の話を聞きながらあれと思って、私も気がついたのですけれども、半分は自分でもどう考えればよいかと思いつながら言うのですが、現在のいわて県民計画でどういうことを掲げられているかということはある程度我々念頭に置かなくてもいいのですか。

○**吉野英岐部会長** 総合政策審議会の部会だから、念頭に置いた方がいいですね。

○**山田佳奈委員** もちろん基本的にはシンプルに調査結果を示すということが重要であって、もちろんそれをやりつつ、ただ多少は…。それこそターゲットがもし違ってしまった場合、我々の分析が少し違うところに、後での評価のときにやりにくくなるのではないかなという気がちょっとしたのですけれども、言い過ぎですか、これ。

○**吉野英岐部会長** 県民計画は、最初からまず広域圏別につくっている冊子もありますよね。

○**照井政策企画課総括課長** 政策は全県域で一本になって、あと広域圏別は広域圏別で作成している。

○**吉野英岐部会長** 別としてつくっていますよね。だから、そういう県民計画の構造とくっつけないと。

○**山田佳奈委員** 何となく多少、全部ではないけれども、どこかでは意識していた方がよくないかなと。ちょっとちらっと思いました。

○**照井政策企画課総括課長** 今の分野は、県民計画とは一致していますので、議論していることがこの県民計画の10分野の政策という形になります。

○吉野英岐部会長 分野は全部リンクしています。

○池田政策企画課主任主査 特にも、こちらの政策推進プランを評価するために今回のレポートを使うということになっていまして、この中が分野別の中にさらに政策項目がぶら下がっているという形で整理されていますので、当然この評価に活用できるような中身を念頭に置いていただいてやっていただいて、あと当然今回整理された内容、データについては各部局の方に随時提供していきたいとは思っていますので。

○山田佳奈委員 というのは、その中で重要と考えている施策というのがあったわけですよ、多分、重要項目、計画の中にそれをさらに政策に落とし込んだものがかなり具体的に書かれていたのだと思うのです。例えば余暇の使い方とかというのは、これどう見ますか。

これが政策の方で、つまり検討事項の中で県民計画の実効性を高めるという文言が入っているので、もしそれをやるとすると、例えば一定の関連する場所のどういう施策等を念頭に置きながら今回の余暇をどう考えるかという一つのヒントにはなるかなと、あくまでもひっかけりです。場合によってはそことの比較というか文言、文章をつくるということもあるかもしれないということ。

○吉野英岐部会長 それは、評価の委員会だから、ここでなかなかやっていないからあれなのですかね、評価の委員会だと実はこの分野と個別の政策項目の関連というピラミッドみたいな図が出てきて、ここにこういったもの全部入っていますよというのがあるのです。ここもある意味そことリンクしているといえはしているのです。リンクしていないと逆にレポート書けないので。

○山田佳奈委員 基本的には、前ですと研究会でしたので、かなり自由に書けてということだったと思うのですけれども。

○吉野英岐部会長 だから、これはむしろ廣田さんの方でやっている分野ですよ。どの政策が何個あってそれがどこの分野に収まるかというやつ。

○廣田政策企画課主任 それがこの県民意識調査の今言われている分野というところに。

○吉野英岐部会長 分野は分かったので、個別政策については今ここで全然出てこないから、どんな政策具体的にはやっているのですかと言われると。

○照井政策企画課総括課長 それが政策評価委員会がやっていまして、各事業ごとに目標を掲げておりまして、その実績数値を今まとめているところなので、今数字の部分は別途作業をさせていただいております。今回ここで議論いただいているのは、例えば議会でもちよつと言われたのは数字は上がっていると、でも県民意識では下がっているのではな

いかと、そういうのはどう見るのだというところの問題提起があって、では県民の意識、実感というものを専門の部会において、どんと深掘りしてみますかという経緯として今回議論させていただいているので、今度は数字と実態をミックスして政策評価委員会としても全体を見せていく形になるのですけれども、今特に実感の専門のここで議論にかけているという過程でございます。

○山田佳奈委員 ありがとうございます。ここだけで、我々だけで完結してしまっているのかなという、ちょっと見通しというか、後のこともある程度は考えた方がいいかなと、あんまりやり過ぎるとちょっと危うい感じになってしまうけれども。

○吉野英岐部会長 評価の委員会で作せる、去年の分でもいいのですけれども、こういう構造になっていますというのが出せるので、それは参考資料として持ってもらっていても大丈夫かなと思います。昨年度でいいと思います。その中でここ議論しているのですよというのが、位置づけが分かると何を言っているのか、あるいは何を言ってはいけないのかということが分かると思います、勝手な分析すると言われると。

○山田佳奈委員 それはどう生きてくるのかという。

○吉野英岐部会長 事前に自分がしゃべっている話というのは何に使われるのかとか、あった方がいいですね。

○山田佳奈委員 視点を得られればいいのではないかなという、そんなところです。

○吉野英岐部会長 確かに委員さんは評価に入っているのは私だけなのかな。

○池田政策企画課主任主査 そうですね。

○吉野英岐部会長 だから、私は一応曲がりなりに整理をしつつしゃべっているのだけれども、確かにそういうデータが全くない人たちから見ると何に使うのですかこれと言われる。実は事務局は両方やっているのです、事務局も当然知っているというか、評価とリンクした形で分野ができていたりとか、政策がその中にちゃんと収まっているとか、その政策は進んでいるか遅れているとか、そういう評価に基づいて全体の評価上がってくるのかというのは当然御存じの上でお話しされているのだけれども、こっちは知らないといえば知らない。

純粋な研究なら幾らでも侃々諤々でいいけれども、結局落とすところどこに持っていかとかがないのであるのではないかなということなので、ちょっとその構造も出してあげていただいてもいいのかなと思いました。

なかなか議論が進まなくて申し訳ないのですけれども、ちょっとこの後は6月17日でしたっけ。

○池田政策企画課主任主査 19日です。

○吉野英岐部会長 19日でしたっけね、約1か月はないのだけれども、二、三週間ぐらい空いて、その間にまた整理をしていただくことにして、もう一回このレポートを書くための討議はできると最初から聞いていますので、ただ永遠にできるものではないので、だんだん取れんさせていく必要があるので、6月19日より前にいろんなデータをまた事前に配っていただいて、議論のポイントを一定程度絞った上で19日もう一回議論していきたいと思います。

いいですか、ティー先生できますね。

○ティー・キャン・ヘーン委員 大丈夫です。

○吉野英岐部会長 多分あちらから御注文がいっぱい来るかと思いますがけれども。

○ティー・キャン・ヘーン委員 返しますので。

(2) その他

○吉野英岐部会長 なかなかすみません、成案が出るまでもう少し時間かかりますけれども、でも委員の皆さんが疑問に思うところは早めに解決しておいた方がいいと思いましたので、先週、今週でちょっとなかなか進行表どおりに行っていませんけれども、御容赦いただければと思います。ただ、時間も来ておりますので、一旦今日のところはこれで終わりにして次回につなげていきたいと思います。

3 閉会

○北島政策企画課評価課長 長時間にわたり御議論いただきまして、ありがとうございます。

今日頂いた宿題をまとめて次回の6月19日に開催を予定しております。時間は1時半から、会場はこちらでの予定になっていますので、よろしくお願ひしたいと思います。

以上をもちまして、本日の部会を終了します。ありがとうございました。